

<資料紹介>シリーズ『青松』を読む⑦

手づくりと、^{たたか}戦ひと、拳島へ

—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて—

阿 部 安 成

シリーズ『青松』を読む①「手づくりで始まる」
 滋賀大学経済学部 Working Paper Series
 No.243, 2015年12月。
 シリーズ『青松』を読む②「手づくりで詠む」同
 前 No. 244, 2016年1月。
 シリーズ『青松』を読む③「手づくりで偲ぶ」同
 前 No. 250, 2016年4月。
 シリーズ『青松』を読む④「手づくりで悼む」同
 前 No. 251, 2016年4月。
 シリーズ『青松』を読む⑤「手づくりを保つ」同
 前 No. 255, 2016年7月。
 シリーズ『青松』を読む⑥「手づくりで伝える」
 同前 No. 256, 2016年8月。

『青松』を読む 現在、ハンセン病をめぐる国立療養所は13施設ある。それらのもとをたどると公立あるいは国立の施設として始まり、開設後の園内で総合誌といい得る逐次刊行物を編集発行してきた。それらの多くが第二次世界大戦の戦時下に発行停止となり、そして戦後になって復刊されたばかりがある¹⁾。物資不足などを理由に逐次刊行物が療養所からなくなったなかで、国立療養所大島青松園では、活版印刷でも謄写版刷りでもなく手書きで、かつ機械製本ではなく手綴じ手づくりで1冊かぎりの「廻覧」する読みものをつくっていた。誌名を「青

松」という。

それ以前に大島にあった総合誌の『藻汐草』（活版印刷）は1932年4月の創刊で、1944年7月発行号をもって「休刊」となった。それから4か月ほどのちの11月には、手書き手づくり『青松』の第1号が「発行」されたのである。手書き原稿を謄写版で刷った刊行物は、療養所内でけして少なくはない。だが手づくりで1冊かぎりの読みものとなると、これはとてもめずらしいメディアである²⁾。

2012年からわたしの監修と解説執筆により、「リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ」が近現代資料刊行会から出版され、そのシリーズ4として、この手書き手づくり『青松』の発刊を予定している。そのための作業の一環として、「シリーズ青松を読む」の発信を始めた。同シリーズ1から6まではべつの媒体に載せ、本稿同シリーズ7はつごうにより本誌に寄せることとした³⁾。

第9号 縦書きの題字が、しっかりとした筆による。号数表示は、右から左への横書きで「第九号」。表表紙には、それらの5文字のみ。いつできあがったのか、それを報せる表示はない。

目次 目次に縦書きで記された掲載稿を順にあげると、井上真佐夫「戦友愛」、土谷勉「駆

- 1) そのようすについては、阿部安成「復刊のときへーハンセン病をめぐる国立療養所における総合誌と〈戦後〉」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.242, 2015年11月）を参照。
- 2) 国立療養所邑久光明園内でも1冊かぎりの手書き手づくりの逐次刊行物がつくられていた。ただしそれは戦時下ではなく戦後の1947年創刊だった（阿部安成「楓の手づくりー国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の総合誌」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.245, 2016年2月、を参照）。
- 3) 史料の引用、転載にさいして、旧漢字は新漢字になおし、かなつかいは原文のとおりとした。あて字、誤字、脱字についてはとくに「ママ」のルビをつけずに原文のままとした。当時の表現、表記、言辭は歴史用語としてそのまま用いた。

虫」, 武田祐吉著「万葉集新解」, 浅野繁「機雷監視哨の歌」, 笠居誠一「長歌 沖縄の少年を憶ふ」, 笠居誠一「機雷監視所を訪ふ」, 綾井譲「短歌 沖縄島」, 赤沢正美「短歌」, 泉俊夫「クク監視哨抄」, 吉田正秋「俳句作品」, 松田美津夫「機雷監視」, 小見山和夫「つぶやき」, 斉木操「念々句生」, 「児童作品」, 「後記」, そして, なぜか目次のしたに, 横に寝た縦書きで「合田とくを遺稿集／松の花」の文字が謄写版で刷られている。

この遺稿集『松の花』は大島の療養者を悼んでつくられたものなのか, その冊子の表表紙か扉(厚紙だから前者か)にでも使った紙を再使用したようだ——大島のキリスト教霊交会教会堂図書室には, 『松の花』という書名の本はなかった。

巻頭 これまでであれば巻頭言などがあった最初のページには, 「筑波岳に登りて, 丹比真人国人の作れる歌」と題された稿がある。柘目のある原稿用紙は謄写版刷りで, 本文1行めの欄外に「382」, 最終行とそのまえにまたがる欄外には「383」の数字がみえる。万葉集の歌番号である。

この稿の裏面は, やはり謄写版刷りの原稿用紙で, 欄外にページナンバーの「51」が記され, 柘目を3首の短歌が埋めている——「寒雷の轟き聞けりジヨホールバルに勝進み行く軍想ひつつ／枕辺にはづ眼鏡の黒縁が灯光を吸ひて淡く光れる／うかららに思ひ及ひて癪われ除籍の願書下書をしぬ」。ページの全体におよぶようにおおきく×の抹消線が引かれている。これはすでに別稿でとりあげた, 本誌第8号に綴じられた笠居の下書き稿の一部だろうか。第8号の原稿用紙にあったページナンバーは, 9(全体に×の抹消線あり), 11(同前), 2(同前), 1(同前)だった。この第9号でいわば再生紙として使われたこのページナンバー51も, 反故となった原稿の一部だろうか。

ここで綴じのところに用いられた貼り紙には, 「故北山謙三氏追悼号」との手書き文字がみえる。

本誌第5号が「北山謙三氏追悼号」であり, その表表紙には号名が右から左への横書きで記されていた。この第9号の裏紙では追悼号名が縦書きで記されている。これもまた反故となった紙の再利用だろう。

奉公 井上真佐夫「随筆／戦友愛」は, 中央に「患者用紙」の名が印刷された黄色い縦罫線の用紙に記されている。これは大島の療養所の, しかも療養者の専用罫紙なのか。

「最近, 新聞や雑誌で“戦友愛”と言ふ言葉がよく使はれ, そして強調されてゐる様に思ふ。戦争を勝ち抜くためには一億国民の一人々々が親子, 兄弟, 夫婦間に於けるところの愛情, 即ち肉親愛を以てお互に助け合ひ, 労り合ひ, 励まし合つて行かねばならぬ」と始めた稿で井上は, 「さて, 決戦下の活社会が生んだ戦友愛の美談佳話等は山ほどあること、思ふが, 社会のことはさて置き, 我が大島の戦友愛に就いて少し書て見たいと思ふ」と, 話題を大島のなかへと転じた。

先に私は「青松」第六号, 即ち上本兄の追悼文中に於て, 「我が大島は四季を通じて変らぬ清らかな白砂と, 美しい松のみどりに相対して, 人情味豊かな島であり, 相互扶助の集団である」と述べた。／事実「愛」と「人情」の点に於ては, 他の療養所の遠く及ばぬ美点として吾々は大なる喜びを知り, 誇りを感じずると共に, 身を以てその範を示された先輩諸兄の心を心として感謝し, 御遺徳を讃へつゝ今日に至つた。

と来し方をふりかえる。そのうえで,

然るに近時, 日に月に熾烈なる様相を展開しつゝある戦争の反映であらう兎角人心に角が出来, 刺々してやゝともすれば, 温い人情がその影をひそめつゝあるのではなからうかと思つた一人である。いや私一人ではあるまい, 古い病友たちは同じ気持を抱かれ, ひそかに眉を曇らせてゐたこと、思ふ。〔引用者による下線部は原文では赤インク傍線〕

と現状をとらえてみせた。戦争が人心を刺々し

くしているというわけだ。それが、しかし、さうした心の内の暗い影や取越苦勞は、一陣の風が持ち去つた、さ霧のやうに一ぺんに吹つ飛んでしまつた。それは横穴式防空壕と、機雷監視哨をめぐつて咲き香る美しくも香り高い人情の花を見せられたからである。着工して以来既に二ヶ月、その間奉仕者一同は勇んで防空壕構築の鉤を執り、鎚を振つて勤勞の汗を楽しみ、将又雨の日も、風の夜も只黙々として機雷監視の大任に當つてゐられる聯合奉仕団員の言語に絶する勞苦に感謝し、汗を勞はる慰問金品の寄贈発表を吾々は所内ラジオを通して拝聴してゐる。〔引用者による下線部は原文では赤インク傍線〕

戦時下ゆえに必要なせまられた「防空壕構築」と「機雷監視哨」の実施、そしてそれらに感謝する「慰問金品の寄贈」によって改善されたというのである。

防空壕に一鉤を奉仕することも、機雷監視に一夜を明すことも出来難い人達が(極少数、奉仕者中にも慰問品の寄贈あり)真心を贈る温い愛情、これが戦友愛でなくて何であらう。防空壕に一鉤を奉仕し、機雷監視哨に一夜を過すことにもさも似たこのうるはしい行為を吾々は高嶺の花、天上の星と讃仰するものである。煙草一本にも、拾錢紙幣一枚にも完成を祈り、無事を願ふ切なる愛情が宿つてゐる。〔引用者による下線部は原文では赤インク傍線〕

とは、肉体を動かしてする奉仕をなし得ないものたちによる、「慰問金品の寄贈」とその意思を、療養所内の「戦友愛」として讃えようというのである。

贈られた吾々は何れも貧者の一灯と謙遜せられてゐるが、人の心を動し、力付け、励ますものは品物の量ではない。金円の高ではない。其処に籠る真実心こそ最も貴重であり、こよなく尊いものである。贈る者、贈られる者みな感謝であり感激である。〔引用者による下線部は原文では赤インク傍線〕

とも、その「戦友愛」が言祝がれている。現時は、

昼も、夜も、朝も、夕もひつきりなしに警報が吾の耳朵を打ち、奥谷の三軒家にも爆弾の雨か降る状勢下、この美しくも香り高い大島の花であるところの戦友愛こそ六百病友の心と心をしつかりと結んで離さぬ鎖である。そして一人々々のうるはしい行為がその鎖の一環々々を意味するものと言へよう。／吾々の島は、吾々が立派に護り抜かねばならぬ、六百病友が打つて一丸となり、渾然一体となつて戦ひ抜き勝ち抜かねばならぬ。これか即ち吾々に出来る御奉公であり、皇土護持の道なのである。／第二の横穴式(現在の防空壕)も完成までにはなほ旬日を要するであらう。その上に第三の防空壕と、是から先何年続くか分らぬ機雷監視の大任が吾々の前途に横たはつてゐる。之等を只単に対岸の火事として聯合奉仕団員のみに課せられたる任務と夢にも思つてはならぬ。六百人の一人々々が光榮ある任務を双肩に担つてゐるの自覚と責任を堅持せねばならぬ。／戦ひが苛烈になればなるほど、吾々は今後一層うるはしい戦友愛を発揮して助け合ひ、労り合ひ、励まし合つて応分の御奉公を申上げねばならぬ。／大島の本当の姿がある美しい人情を見聞して、敢て愚感を述べた次第である。——終——〔引用者による下線部は原文では赤インク傍線〕

縦罫紙2枚両面もの紙幅を使って井上は、助けあい、いたわりあい、はげましあい、の語をくりかえし、また、麗しい、の形容を用いて、自分たち療養者に可能な戦時下の「御奉公」の仕方を説いた。

創作 土谷勉「駆虫」は、柘目を謄写版で刷った原稿用紙に記されている。最初のページの右上端に、印影のある紙片が貼られている。母と息子の肖像に見えるそこには「国の宝」の文字が認められる。14枚におよぶ原稿は、「内用薬」票の裏面を活かした紙である。

ひよつとすると、もう居なくなつてゐるかも

知れない——など、虫がよい。南瓜の種まであんなに食つたんだから。そんなのが当にならうぞ——。／“顕微鏡のぞく師をさへもどかし／吾が検便の上を氣遣へり”／診察場の窓に葉桜がそよいでゐる。糞も一度顕微鏡にかゝると、もう俗世間の汚穢を超絶し、一ヶの神聖な科学的対象物である。思ひなしか先生の横顔まできびしい。／“虫居るとのらす医師の言の葉を／たゞ頷きて聞きゐたりけり”／やつぱり駄目か。襟を搔合してきゝ乍ら、五月も末といふのに寒々しい／“入院した方がよいのでせうね”／「した方がいゝですね」／〔中略〕僅かの間だ。何とかならう。物資不足の折柄、腹の虫まで育てたことが憎らしい。

と始まる文章は土谷の創作なのだろう。表題にいう「虫」とは「腹の虫」だった。折々に短歌が挿入されて話が展開する。これまでの土谷の稿にはなかったあらたな手法である。ただ、「病人らしく扱つて、膳箱まで病室に運んでくれる部屋の友情が涙ぐましい。石本さん始め詰所の皆が労つてくれる」と実在の人物が登場すると、これは実体験をふまえた記録といったほうがよいのか。このとき「私」は「三十七歳になつた」とのこと。「童の頃、祖母から／「向ふこと皆おかげ」／と、何度も言ひきかされたことを憶出し、「黒住教の神官を勤めてゐた」その祖母のことがあれこれと記される。

「特別どうといふのでないのに寝てゐると何だか濟まないやうな氣持がする」「ていねいな見舞をうけると苦手である。勿体ない病人である」と記されたそのあとは、いくつもの短歌がみせられて終わる。

その裏面 土谷の稿は、そのいくつかの裏面もまた使用されている。ページノンブル1の裏には、「神皇正統記より」の抜粋が記された原稿用紙の断片が貼つてある。ページノンブル3の裏には、出征した元職員から「私信をいたゞき宛名が知れました。皆様どしどしお便りを差上げませう」と、「中支派遣第四五野戦郵便局

氣付／^{しんてん}震天二三一四一部隊本部」とその宛て先が記してある。元職員の名は、奥村竹一。ページノンブル4の裏面は、エンボス加工のある絵（画面左下隅に「80」とある）。

ページノンブル6の裏面は、「潮音」——

◎先日は直木三十五の剣豪伝の朗読放送があつた。私は興味深く山本、岩崎両氏の放送をきいた一人であるが、けふはからずも賤ヶ嶽合戦に於て強豪戸田隼人を討取つた加藤清正のその時の氣持を記した「甲子夜話」を見た。加藤清正の如き大勇士にして尚その初陣に於ける氣持は此の如く夢中であつたのである。「甲子夜話」は清正がその子に語つた處を記したものである。

以下、当該箇所か、その引用がつづく。

ページノンブル9の裏面も「潮音」——

◎馬鈴薯のこと——。／馬鈴薯は主食である。農事委員の査定に基き主任會議（五月二十八日）の結果、供出量各人四十二貫と決定した。それ以上の供出量に対しては貫拾錢の報奨金がつく。片方では六十メも供出する人があるかも知れないが片方ではグツト少い人も出来るだらう。農作者の総数が三十人であるから四十二貫平均で一二六〇貫。今年はお湿りの順もよかつたし心あらば土中の薯よ、吾等の期待を裏切る勿れ。土谷〔押印〕

ページノンブル10の裏面には、だれかの座像の写真が貼られている。その右下隅に「65」とみえる。さきの1葉とは一連となるか。ページノンブル11裏面に、なにかの絵画の複製写真があり、その左下隅に「41」。

ページノンブル13の裏面に、謄写版で刷られた原稿用紙が貼つてあり、そこに——

◎園内状況（六月一日調）／総人員五六〇名／普通室三二二名（男二三七，女八五）／特定室二三八名（男一二九，女一〇九）／作業希望者一九六名（男一三三，女六三）／作業数一六五點／補充一一名

と記されている。

物見 おなじ謄写版刷りの原稿用紙2枚の

裏表におなじ筆跡のペンで記された文章は、同一人によるとみてよい。1枚めは、これまでの号にも掲載された「[万葉集新解] (三) 武田祐吉著」で、2枚めが浅野繁の「短歌作品／機雷監視哨の歌」。後者の8首は——

けふ生きて機雷監視の任を負ふこのさきはひ
やかならず遂げむ／癪とぞさもあらばあれ岬
山の機雷監視にいのちつくさむ／黒南風の雨
をともなふ岬山に機雷監視の立哨すわれは／
雨雲のひくく垂れこむる海のうへに機雷監視
の眼を凝らす／機雷監視のけぶかき闇に松の
芽のにほひ顕つかも岬山こは／機雷監視の
夜はふかみゆく岬山にしばしばなんぞ啼く鳥
のこゑ／ことなくて機雷監視の夜の明けの霧
におほめく青き船の灯／岬山はあかとき寒し
見はるかす瀬戸の鳥々のさみどりのいろ

第2首のうえ欄外に、赤インクで「◎」の記号が記されている。5つの歌にうたわれた「岬山」はどこを指すか、大島のどこに機雷監視哨があったのか。この「岬山」の語は本号になって初めて誌面に登場したとおもう。

沖 縄 これまた謄写版刷りの原稿用紙、ただし半片羅のそれに、笠居誠一「長歌「沖縄の少年を憶ふ」」が記されている。1945年5月15日の発行とおもわれる本誌前8号につづいて、この第9号はいつつくられたのか。このとき大島に、沖縄の情報がいつ、なにが、どのくらい届いていたのか。

沖縄の児らは愛しき、手榴弾、手に手に持ち
て、雄々しくも、飛弾の霰降る中を、敵陣深く
雄叫ひつ、進み進みて、若干~~の~~〔行間の「い
さぎよく」にも抹消線〕、醜夷を斃し、自らは、
国土防衛に~~勇ましく~~^{いさぎよく}、蕾の花の若桜、開かぬ
ままに散り行きて、わが大君の統御す、大和
の国を永久に、守る勲の尊とさよ、仇は打た
むと、一億の、末の末なる片居われ、島の朝
夕は、神々に、慎しみ祈る、沖縄の、児らを
現実に、想ひ恋ひつゝ、／反歌／沖縄の児らに
つづけと幼らに語る己が眼に涙流るる／ビル
マ通信を読みて／若葉匂ふ短夜よビルマ通信

の陣中吟は繰返し読む／国土これ戦場となれ
る決戦にビルマ遠征の君を想へり

大島の療養者たちは、神風特攻隊について沖縄
の児らとの対照で、「一億の、末の末なる片居」
のみずからをとらえつつあるか。

見張り もう1枚の表裏に、笠居誠一「機雷
監視所を訪ふて」（赤鉛筆で「所」が抹消され
「哨」と記されている）。

敵目標数編隊と聞くからに持場に死ぬる覚悟
新らし／機雷監視の友が指す空遠く機影は黒
う点と見えけり／機雷監視の重き務めに生き
甲斐を想ふ片居の明暮れはあり／羽強う空に
輪をかく鷹のかけ機雷監視の目に仰ぎけり
第1の短歌のうえ欄外に「○」、第3首のうえ
には「◎」が赤インクで記されている。ついで
裏面——

陽光今沈む水平線遙か機影は見えて徐々に太
れる／爆音の飛ぶ夕暮れの空仰ぐ目に輝きて
雲は漂ふ／監視所の友^{（おきり）}犂ひて山下の道に若葉
の風匂ひけり／戦局と戦果は別とふ決戦場沖
縄島に想ひ飛びけり／言あげもせず沖縄に戦
へる兵の一人に師も居ましかむ川染先生〔最
終首に「○」、川染先生、に「 」、いずれも
赤インク〕

特攻隊とも沖縄の児らとも異なる「片居」の所
為が「機雷監視」か。

もう1枚——

防空壕掘り／横穴の壕掘り急ぐ空高う飛ぶ日
の丸のつばさ光れり／〔欄外に「○」〕横穴の
壕より出でて仰ぎ見る空の真澄みに昼の月あり
／片居われ死を恐るゝにあらなくて横穴防
空壕を急げり／掌に出来し血豆は~~見~~^う~~え~~^ち~~居~~^見~~つ~~^つ
病みて久しき身を思ひけり／み民われ今日起
たずして千歳に悔を残すも既に及ばず／片居
われ安らに眠る夜を遠く都の空に敵機おごれ
る／大御母皇太后^{みあらか}ます御殿の燃ゆと聞く夜は
いねず祈れり／〔欄外に「○」〕盲爆に宮城
の一部炎上すと聞く一億の決意極まる／醜翼
は空におごれる此日頃地は増産に馬^し冷^や薯^がの花
咲く／正も義も勝より外に手はなしと仰ぐ夕

空浄に晴れけり／熟麦の匂ふ夕べは故郷の山
川思ふ田作りわれは／夏柴の新芽は光る垣越
しに熟麦匂ふ風の吹き来る／今年生の楓の苗
鉢に植えて水かふ時に故郷思ふ／彼我の陣近
接をして炎むなす沖縄戦線思へば眠れす
さらにもう1枚——

短詩「雲」笠居誠一／爆音の飛ぶ空／雲悠々
と流るる／鯉轢／鯉の泳ぐ五月の空／いよいよ高い

これは、「雲」と「鯉轢」と2つの短詩か。監視哨からみた雲とこいのほりか。

また沖縄 綾井譲の稿は無地の紙の両面に記された、「(短歌)／“沖縄島”」——

死守のみあるとこそきけ童をもをみなの別も
なくて戦ふ／死をもちて守り尽さな光輝ある
三千年の大和国ぞも／皇がため命をしまず戦
へる沖縄今や悲壮と言はむ／飛行雲高く残し
敵の機は真昼を襲ふ撃ちて止まぬを／〔青で
「○」〕敵の機が残して過ぎし飛行雲まさ眼に
見つ、術なき我か／こゝよりはゆるすべから
ぬ天津神護り給はせ勝たしめたまへ
勝を願う、しかも、「正も義も勝より外に手
はなし」か(笠居)。

自虐 「十行 廿字詰」「コクヨの165 規格
A4」の文字と柀目が印刷された原稿用紙に、
赤沢正美「短歌」が記されている——

〔欄外に赤インクで「○」〕機雷監視の視野ひ
そやかに照る月の動くともなし夜は更けに
つゝ／月光に漂ふ霧の白きま、警戒発令は解
かれたりけり／月読の光り煌らとある海の遠
くは思ふ防人の友／〔欄外に赤インクで
「○」〕むざと病む我れなりながら機雷監視の
任果すべく激つ血潮や／浦安の安らなる浦乱
すべき敵はたゞちに撃つべかりけり／彼の
道 此の道 夢は夢となり 蒼空に投げた自
虐を そつとひろい 浜でねてゐる。

立哨 「短歌 監視哨抄」と題された泉俊夫
の作品——

白白と月夜は泛ぶみさき道心厳しく吾が立哨
す／〔赤インクで「○」〕警報下船影もなく

内海は今宵まどけき月に更けつゝ／岬とほく
なき過ぐ鳥のこゑ絶えて月に更けゆく海のし
づけさ／監視交替待つ間しばしの眼に沁みて
八ツ手葉に耀る朝光のいろ／事もなく任務終
えたる安けさよ身も軽々と吾あゆみろつ／
〔赤インクで「◎」〕防空壕堀りつぐ音のひび
らぎは工事進みて聞えずなりぬ

監視 「十行二十字詰」の文字と柀目が印刷さ
れた原稿用紙(中央部に「庶務部」の印影)に、
喜田正秋の「俳句作品」5句が記されている——

敵機いま我が上にあり濃山吹／〔欄外に赤イ
ンクで「○」〕山吹の垣根がくりの退避壕／〔同
前〕退避壕の中に来てゐる春蚊かな／〔同前〕
東風の丘機雷の監視怠らず／監視する海の広
さよ五月闇

喜田はもうひとつ、「自句自解(四)」を載せ、
「雨降らす船のホースや鰐釣る」をとりあげた
——「此の句は、かつて紀州に遊んだ際、鰐釣
を見せてもらつたのを回想して作つた句である。
二尺に近い鰐が空間にきらめき躍る壮快味を味
つて頂ければ幸である」とのこと。「紀州に遊
んだ」とはいつのことか。そうした回顧をなし
得ることは幸いか、その過去が現時のわれを苦
しめるのか。

絶景 「No.23 10×20」「No.」の文字と柀目
が印刷された原稿用紙に、松田美津夫「“詩”／
機雷監視」が記されている——

監視詰所は雲井寮／春 まさに 末つ方の晴
天日／屋島霊峰 淡煙の中にゆるがず／
波 おだやかにして 平和そのもの——／カ
ブト ヨロイの両島 はるか／小豆島東端か
すかに望む／絶景前に 我は立つ……！／処
は同じ 此の処。／＝わずかなれども菓子の一
袋／ポケットにしおぼせて立ちしことあり
＝／彼の日の生活 其の豊かさ 其の平和／
やぶりし者は誰！そも何者！！／ありし
日 なつかしみつゝ、今日 此の日／清き怒り
にもゆる我が眼 はた如何に…／野望の
衣 ぬぎ捨て 正体を現わし／東亜の 生血
を楽しまんとする／仇敵 米英 よしや し

のぶも／体を流れる赤血 彼を許さず／
一億一心 戈を取る……／＝此の療島より彼
におもむきしは幾そ人＝。／しかして やめ
る身我も此処に立つ—！／五月二十七日
——冒頭「監視詰所は雲井寮」というのだから、
さきにみた、機雷監視哨の「岬山」とは島でい
う北山で、岬とは山から北と東につきてた馬の
背か牛の背を指すか。

なお、「機雷」とは、機械水雷の略で、近づ
いた艦戦などを破壊するために水面下や海底に
敷設する爆発物である。地雷に対して水雷でよ
いだろうが、なぜ「機雷」というのか。

もうひとつ作品が掲載、「詩」／奉仕 松田
美津夫。散文体の「詩」は、病友「K君の行
く手に／未完成の横穴式防空壕が／奉仕団に戦
ひをいどんで居る……！」と結ばれた(5月27
日付)。最後の原稿用紙には、「^白原稿用紙」「10
×20」の印字がみえる。

つぶやく 「十行 廿字詰」「コクヨの165 規
格 A4」の文字と柵目の印刷された原稿用紙
の表裏7面を使って、小見山和夫の「つぶやく」
がある。小見山の長編は、「「青松」七号」への
感想などとなった。ところどころに赤インクの
傍線が引かれている(この稿ではその表記を略
した)。

まず、「土谷兄の「百姓の話」——「大変い
いものだつた。〔中略〕殊最後の予想表は有難
かつた。私はこのやうな文章が「青松」にたく
さん出ることをのぞんでゐる。妙に骨が張つて
書いたみたいな概念めいた論文などよりは心に
ふかく沁みこむものがあるからだ」。

ついで、「歌の出詠が少かつたのは淋しい」
としつつも、「笠居兄の短歌はいかにも兄のも
のだ。兄独特の手法、調子等に生々しい兄の体
臭を感じることが出来た。これは兄の文章につ
いても同様である。人柄であらう」と讃える。

「浅野君の長歌」については、「堂々たる大作
である」という一方で、「この長い長歌——長
い長歌といふのは変だがそれほど長い〔中略〕
人麿や憶良や家持の作品にもあまり見られない

やうなこの長い長い歌は、その長すぎるがため
にかへつて切角の感動をうすめてゐるのではな
いかと思ふ。反歌の数が多いのもまた之と同じ
ことが言へると思ふ」といい、この点について
は、「現在の様な時局のありやうの中では短歌
の様な制約を受ける短い詩型で表現するにはあ
まりに感動が大きすぎるといふので短歌に盛り
切れないものを長い自由な形式で表しようとする
のもまた肯ける一つの傾向でもあらう。だから
といつてやはり歌には歌の制約があり最大限
の感動を最小限のことばで表はすところにある
短歌本来の生命を忘れてはならない」との歌論
が示された。

ついで、「私はこの頃戦争や時局を詠んだ俳
句をみる度に、あの短歌よりも更に小さい詩型
の、感情を露出しない何気ないやうなことばの
裏にたたへられた深い大きな感動に打たれるこ
とがあるが、歌もまた表現された語の底に脈う
つもののなければならない。ことば だけで終
つてはならないのだ」とも説いた。

なお『青松』の誌面は、「細字のため私の視
力に及ばなかつた」稿がいくつかあり、それが
「斉木兄のもの、井上兄のもの」だという。他
方で、「読みいいのは土谷、長田、浅野の諸兄
も文字である」とのこと。たしかにこの3名の
文字は、いまでも読みやすい。

『青松』以外はどうという——

最近読んだもの■や聴いたものでは、廻覧
の「大洋二月号」前線カメラマンの座談記
事(こは斉木兄が読んで呉れた。)がよかつ
た。一枚の報道どれほど大きな労苦が払は
れてゐるかといふことを識つた。まこと心
なしに眺めては申訳ない。軍の科学に与る
人々に＝空襲の下で＝等しい読物だつた。
戦地篇三つはあまり感心しなしかつた。
ともに力が足りないと思つた。

との感想を寄せ、また——

「文芸春秋」一月号では上田広のものがよかつ
た。この人はいつ書いてもいいものを書く。
舟橋聖一の「紅」、書き出しに心をひかれた

が案外面白くなかった。横光利一の「旅愁」、ずっと始めから続けて読んでみただけに嬉しかった。腰を落着けて書かれたこの様なものが今日読まれることは嬉しい。

ほかにも——

「夜明け前」「吉野葛」も読んで貰った。藤村のものには私はあまり馴染がないが、谷崎のものは好きだ。ことに谷崎随筆集はかなり読んだことがあるか、五月の古井戸の底をのぞく様な深い清冽さを感じたことを思出す。「吉野葛」は若い頃のものだと思ふが面白かった。後を読んでみたい気がする。／尚斉木君から聞いて岩倉政治の「草のなか」といふのを借りて来て読んで貰ったが大変面白かった。この人の名は私には初めてだが、気持のいい本だった。

との感想が記された。

すでに別稿でみたとおり、小見山は目がみえない。それについては——

ほとんど私は人に読ませて聴くので感じ方が違ふかも知れない。本を聴くといふことの難しさを此頃つくづく思ふのであるが、殊に通俗本や講談本などは喜ぶが文学は余り面白がらない様な人の場合等特に骨が折れる。幸ひ斉木君のやうな古人友人がゐて読んで呉れるので大いに喜んでゐる。私はこの友の友情に甘へる乍らふかく感謝してゐる。けれどもいつも斉木兄ばかりといふ訳にもゆかないので、年近かな所頼むことも多い。それが色々の口調のくせがあつたり、訓みが変わつたりするのである。句読点を無視したり一つのセンテンスから次のセンテンスに移る処の呼吸が出ない位のことはもう馴れて平気だが、まごつくのは訓みである。ソ聯(ソーレン)、愉送(ユーソウ)、寿永(ジュエー)等一種の方言とでも言ふかこれは讃岐の人に多い。／また、御稜威(オンミヅ)、風上(フージョウ)、定石(テイセキ)、必定(ヒツテイ)、定義(テイギジョーギ)等少からずまごつく。時には一行も先へ進んでから気が付くことがある。

元来文字といふものが眼で見るために出来てゐるのであつてみれば、聴くに不便なのは当然であらう。

と「本を聴くといふことの難しさ」を綴った。さて、この綴る、記す、という行為はどのようにおこなわれているのか。療養所内での目がみえないひとたちの読み書きをめぐる記録と、小見山稿はなる。

小見山はラジオについても記した——

ラジオで聴く朗読はさすがにうまい。が、これもラジオの調子が近頃のやうに悪いと判りにくい。昨夜「立派な兵隊」といふ朗読を聴いた時、その中に「見落とした文字は見直すことが出来るが、聞き落した言葉を聞直すことが出来ない、」といふ処があつた。私は聴取り難いラジオの中からこの一句を妙にはつきり聴いた。私はかつて「聴き上手になれ。」と言つた盲人の言葉を思出す。

とのこと。

最後に——

私は何だか判らないやうな事を書いた。夜の猫の眼のやうに散大する瞳に遠視の眼鏡をかけて凡その見当でペンを動かす。読み返して見たくも出来ない。それに右手で書けないのでなほ書いたものが変だらと思ふ。が、之もどうにもならないではないか？と私は私は青嵐の窓につぶやく。

彼はまったくみえないのではないようで、いくらかみえる目に「遠視の眼鏡をかけて凡その見当でペンを動か」していたのだった。

原稿4枚め裏(8面め)は、やはり小見山の「短歌」となる。まず「防空壕」5首——

いのちなり癩五百をなほ護ると防空壕は作られにけり／防空壕うすら暗きに振る鉄の音こもりつつ昼日ながきを／疾める身をなほ奮ひつゝ日を重ね防空壕はふかく掘られつ／壕出でてすなはち仰ぐ六月の真陽の明きに声のむしばし／おろそかにつゆすまじきぞ大君の臣の末なり病む一人とも

つぎに「奉仕団員に」2首——

病みつつも更に病みある人のため捧ぐ誠ぞ益
良雄の道／島人ら相愛互助の道清く貫きやま
ずみ光のもと

読み書き 「No.1」から「No.5」までのペー
ジノンブルが手書きで記された縦罫紙に、斉木
操「夜明け前」に因みて／念々句生」が記さ
れている——

戦局特に形容の度を超え、形勢の急迫愈々容
易ならず終戦状態とは真に心許るされざる事
態にあり。／されば斯かる日、我等は如何に
処し、如何に生くべきか！／最近父を喪ひ、
故郷を失つて混沌たる思考の中にある私には、
今日これが一入切実な問題であり、悩みなの
である。／この悩みを脱却し、彼岸への道を
辿るべく、私は今あるものを求めて必生の努
力と、探索を続けてゐる。／(併しこれは到
底望み難い無難なことであらう)／自分如き
にして斯かる大袈裟を目し以て、能はざるは
必然と識りながら、止まらざる故に其所に昏
迷あり、焦燥の生じ来るのである。／この気
持は日常の些事にも現れるかして、仰臥椅子
を日向に持ち出し読書するにも、寒冷頓みに
神経をいらち幾度か置場所を換へ、併して安
住の地の見出し得ない私である。／元より今
日我等病弱なりとて、唯徒らに安易の愉安の
み貪ることの顧て忸怩ならざるはあらざれど、
扱、併ればとて豁然展けくる道は見出すべく
もないのである。

と、いくらか鬱々としたようすで文章がはしり
だした。ついで、

沖縄を想ひ、灰塵濛々たる都市の災害を見聞
する時、鬱勃たる憤懣は我等の内にもきざし
来るのであるが、それを直ちに対象に打ち突
け行くことの叶はざるが故に、我等は悲憤慷慨
散じ得ぬ嘆息を覚ゆるのである。私は今こ
の思想と行動の分離する環境を忘れんと、も
のを読み、ものゝ教へを繙いてゐる。／然し
これらも現今の複雑苛烈性に比し、余りにも
浮薄的文字の羅列に過ぎなく思へて、もどか
しくてならないのである。(既往の文字は

箇々中心の思想に上走り、仏典は余りにも因
縁臭さ過ぎて消極的に思へるし、“戦争と平
和”でも鑑たなら「何か」と思ふが視力等考
慮し今一寸臆勃だ)／蓋し、吾が欲するもの
は理論の外なる端的なる実行にありと思考さ
れるのであつて、昨夜大本営発表の“人雷特
攻隊”の如き、最し我等にも許し得らるれば、
一瞬の躊躇もなく、其所に飛込み行き、然し
て初期のものの達し得られんものかと、今私
はそのことをば真剣に念ひ見るのである。

と、まさに肉体を賭した兵士の戦いにわが身を
照らすのである。

そして表題が活きる——

然し、斯かる極端を望むも蓋し煩悩の夢にし
て、結局は彼の“夜明け前”の主人公半蔵が、
新日本創造の陣痛期に処し、その去就に迷ひ、
逡巡懊悩の揚句、結局一小市民としての、自
己の職責の中にその使命の尊さを感じ、以て
黙々蔭の本分を守り、忠節を励み、庶民を益
してその功大であつた如く、卑近の忠節を致
す外なきが私の実際であるであらう。／それ
が又、神武創業につながる我等の实践であり、
積極性でもあらうから……／要するに文
学的情操を以て乾燥し勝な人心を慰し、廃た
れんとする道義救済の資とするもこれ亦、草
莽の忠なればなりである……／とは
云へ私の初期の悩は解消とは行かないであら
う——／煩悩妄想の垢を雪ぐには、発大清浄
願文瀧水に依るといふ念彼観音之力に待つか、
将又、高僧善智の教へに依るべきであらう
か……

と記されたそのあとに、大島の記事では長田穂
波などにみられる「× × ×」の記号が用
いられて、ここで区切りとなった。

4 枚めの罫紙には、「反語」の表題がみえる
——

ハテ、ではこうしたツマラヌものを書いてそ
れが多少でも自己を磨き、世を益する有用な
ものとなるかと云ふに、それは甚だしく疑問
である。

とのこと、さて、ではどうつづくか——

でも今の私には読み書きすることが止まらぬのだ。之は丁度癖か日々の食事の様な習性故に如何んとも仕難い。／とは云ふもの、近時多くのものを読めば読む程、自分の頭の悪さ筆の拙さが嫌になつて来る。著名の作者や少年の畠山君の鋭さを想ふ時、自分はいさぎよく筆を抛うちたいと思ふのである。然しそれもなし難い。頭の悪さは病気のせいでもある。頭髮も斯く禿げ上る程だもの、今後とも悪くなる一方だと想ふと、誠に悲しい極みである。／然るにそこを推して遣らうとする、之れは甚だしく矛盾した話で皮肉な因果とでも云ふ外ない、総ては没面子メーフワーズなのである。で相変わらず、食糧不足の折柄とて、紙を喰いペンをなめつゝ、駄愚つきながら迷途にさすらひ果てる外仕方がない私である。呵々／二〇、五、二九記。

ここに「畠山君の鋭さを想ふ時」というその人物は、『青松』に作品を寄せていた畠山一義少年を指そう。ものを読み、ものを書くとき、子どもをも尊重する謙虚な姿勢があらわれている。斉木の稿の日付は五月末、戦時下の島の療養所で1945年5月が終わろうとしている。

5枚めは、斉木生から「林先生へ」宛てられた手紙の体となっている——

“青松”第八号での御批評欄にて私に対する“年齢の推測相違”から云々、との「詫言」めいた御言葉を戴きましたが、それが先生の不当な御遠慮であることを茲に説明し以て、御批評を感謝し、尚今後共忌憚なき御批評をどしどし御恵み下さる様御願して止みません。／私の年齢は正直の所、表看板が最早還暦にも近い爺々然であり、内容は正三年生れの当年三十二才なのでありますが、その又内なる思考は全く御説の通り、未だ二十才にも満たぬ青少年にも異らぬ甘い感傷の中でのみ彷徨し続けてゐるのでありまして、全くお恥かしい次第であります。／容貌に依る判定は実の親さへ見まがふ程故仕方の無いことな

がら、せめて内容位いは定価通りの値うちを持ちたいものと常に想ふには思ふのですが……——宜敷く御指導を願ふばかりです——／(以上)、

これは公開書簡の意味あいをもたせたのか。

その裏面 さて、斉木の稿5枚はすべて、その裏に謄写版刷りの文章がある。それぞれに記されたページノズルをあげると、1枚め裏に32と33、2枚め裏に22と23、3枚め裏に36と37、4枚め裏が14と15、5枚め裏が20と21。本誌前8号の斉木の稿もまた、ページノズルが記された謄写版刷り文書の裏に記されていた。そのノズルは18、19、24～29で、本号のそれとは重なっていない。本号のそれをノズル順(14、15、20～23、32、33、36、37)に示そう(原文の漢字カナ表記を漢字かなにかえた)

——

14ページと15ページ——

聯合奉仕団細則／第一条 入団資格者は人事部主任より之を聯合奉仕団長及室長に通告するものとす／第二条 退団資格者は聯合奉仕団長より之を人事部主任及室長に報告するものとす／第三条 団員名簿は警防団、青年団、婦人団別に之を調整するものとす／第四条 団員名簿の要項は氏名、生年月日、入団月日、及略歴とす／第五条 入退団式は毎年三月末之を行ふものとす／第六条 幹事は九名とし警防団、青年団、婦人団に各三名宛を割当つるものとす／第七条 班長は二十名以内とし各団の割当は聯合奉仕団長之を定むるものとす／第八条 幹事及班長は各団毎に連記投票により之を定むるものとす／第九条 本団に左の三部を置く／一 教化部／一 訓練部〔改ページ〕

一 奉仕部／第十条 教化部の取扱ふべき事項左の如し／一 団員の智識、技能、趣味の涵養に関する事項／一 文化の向上、普及に関する事項／第十一条 訓練部の取扱ふべき事項左の如し／一 団員の自主的並団体的訓練に関する事項／一 保険、衛生、運動、競

技に関する事項／一 防水, 防火, 防空演習に関する事項／第十二条 奉仕部の取扱ふべき事項左の如し／一 常時奉仕作業に関する事項／一 臨時奉仕作業に関する事項／一 非常時奉仕作業に関する事項／第十三条 聯合奉仕団長, 各団長及副団長の選挙は総代, 副総代, 主任の選出後に之を行ふものほかの条文をみれば当然のこと第13条の末尾にも「とす」の文字があるはずなので, これは16ページにつづくものの後欠なのだろう。

この戦時下に結成された聯合奉仕団について、『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』(大島青松園入園者自治会編, 大島青松園入園者自治会(協和会), 1981年)の「各種団体の変遷と現況」のページに記されてはいるが, 同団細則への言及はなく, またそれを参照したようすもない。わたしが大島で調査したところ, 『聯合奉仕団報』はあるが⁴⁾, 同団細則はいまのところみつからない。この裏紙は希有な記録となる。

20ページと21ページ——

代に願出づるものとす／附則／第一条 同一種目に關し二個以上の団体ある場合は整理統合して一団体とし之を指定するものとす／第二条 既設団体にして本細則に依り指定せられたる場合は其所有する資材の処分に関しては総代の承認を経るを要するものとす〔改ページ〕

各種団体取締細則／第一条 特定の目的を以て一時的又は恒久的団体を組織せんとするときは予め総代の承認を経るを要するものとす／第二条 前条に依り総代の承認を得んとするものは左の事項を具して届出づるものとす／一 団体組織の目的／二 発起人氏名／三 会員勧誘方法／四 組織方法／五 組織の場所及日時／第三条 団体を組織したるときは二日以内に左の事項を具し総代に届出づ

るものとす／一 団体の細則又は申合／二 役員の名

22ページと23ページ——

三 会員の名簿／四 事業計画大要／第四条 各種団体にして臨時又は定期に集合若くは事業を行はんとするときは口頭又は文書に依り予め其日時及計劃の大要を総代に届出づるものとす／但 幹部の集合及宗教団体の礼拝のための集合は之を除く／第五条 協和会総則第三条の精神に合致し有益と認めたるときは総代は評議員会の承認を経て其団体又は事業に対し必要と認むる助力を与ふことを得／第六条 協和会総則第三条の精神並本細則に違反したると認めたるときは総代は評議員会の承認を経て其団体の解散, 集会並事業の停止を命ずることを得〔改ページ〕

印刷物謄写物脚本取締細則／第一条 印刷物, 謄写物を頒布せんとするときは予め総代の承認を得るを要するものとす／第二条 脚本にして上演せんとするものは予め総代の検閲を得るを要するものとす／第三条 総代は印刷物, 謄写物又は脚本にして風紀を紊し公安を害するものありと認むるときは之を没収することを得／第四条 印刷物, 謄写物は印刷, 謄写するに先たち総代に対し之か検閲を求むることを得／第五条 印刷物又は謄写物には発行責任者の氏名を明記すべきものとす／第六条 定期刊行物にして其発行又は責任者を変更したる場合は総代に届出づるものとす／第七条 総代は印刷物, 謄写物又は脚本の一部の抹殺及変更を命ずることを得／第八条 印刷物又は謄写物にして出版物取締法に依り認可を得たるものは発行度毎に総代に納本するの外前各条を適用せざるものとすここに載る「各種団体取締細則」で参照されている, 「協和会総則第三条」とはなにか。

現在, 大島には, 表表紙に「大島青松園長認

4) 阿部安成「かくれんぼの書史—国立療養所大島青松園協和会(自治会)所蔵史料『報知大島』『所報』『全癩患協ニユース』の紹介」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.159, 2011年11月)を参照。

可／昭和六年三月八日制定／大島青松園入園者協和会々則／協和会」と記された謄写版刷りの文書が残っている⁵⁾。その文書の冒頭に「総則」があり、その第3条は、「本会は大島青松園長の監督指導の下に 皇恩に感謝し国家社会の同情に応へ皇道の精神に則り会員相協和し厚生翼賛の実を挙ぐるを以て目的とす」(原文漢字カナ)とあった。皇国臣民として戦時下を生きるにみあった目的である。これにそって「各種団体」の活動も認められ、これに反した「各種団体」は解散や活動停止を命じられることとなる。

またこの細則で、印刷物や謄写物と脚本がわけられた理由は、芝居活動の盛んだった大島ゆえか。

32ページと33ページ——

利子収入金／一 公募借入金／公募借入金／一 雑収入金／拾得金／売却金／賠償金／一 非常災害資金／非常災害資金／一 繰越金／購買部資金／各部残高／自然増収〔改ページ〕

予備費残高／第八条 支出予算の款項は之を左の如く定む／款項／一 庶務部費／手当謝礼費／慰安娯楽費／助成費／通信運搬費／図書新聞購入費／一 会計部費／備品消耗品費／詰所臨時雇人費／報国献金費

36ページと37ページ——

加工部費／一 非常災害資金費／非常災害資金費／一 予備費／予備費／第九条 款項を新設又は廃止せんとするときは評議員会の承認を経るを要するものとす／第十条 指定せられたる下附金又は寄附金は独立したる項として之を収入又は支出するものとす／但 軽微なるものは之を除外す／第十一条 非常災害資金費は非常災害の場合に評議員会の議決を経て之を支出するものとす／第十二条 非

常災害資金費は貳千円を以て定額とす／第十三条 非常災害資金は使用後三ヶ年に分ち之を補充するものとす〔改ページ〕

第十四条 支出予算は歳入予算額中より災害資金及購買部資金を控除したる残額の範囲内に於て之を編成するものとす／第十五条 臨時事業に要する費用は独立の款として之を編成するものとす／第十六条 予算の款項目の流用は評議員会の承認を経るを要するものとす／第十七条 各費目の用途を明らかにするため目別に附記を附するものとす／第十八条 附記を変更せんとするときは各部主任、会計部主任と合議の上総代の決裁を経るを要するものとす／附則／第一条 非常災害資金の補足は昭和十七年度より之を実行するものとす

末尾の文言から、おそくともこの文書は1941年度につくられたものとおもわれる。

子どもたち 本号にも子どもの作品が綴じられている。ただし、前号にあった修正や講評の追記はみえない(違う手によるわずかな修正がある)。初4須内キヨカ「つばめの子」、初5中島徳吉「風呂」、高2大西哲司「遠足」、高2山上広光「果物」、高2赤松清子「雨」。

まずは、てっちゃん——

僕たちは金曜日の昼から、いよいよ果樹園へ遠足に行く事になった。昼御飯を食べるとさつそく皆で、海岸へ弁当を運んで舟に乗ったが船頭さんが、なかなか来ないのでもう来るか来ると、大変待遠しかつた。／やがて果樹園へ、つくと僕たちはお父さんに言つて、三浦果樹園の方へ畠を見に行つた。見るとじやがいがもが、姿勢正しく模様のように綺麗に植えられて有つた。これも皆、果樹園へ働きに、来て下さる人々のおかげである。／此の広い畠を鳥の為に汗を流して働き、野菜を作

5)「木箱「協和会々則在中／庶務部」史料目録」目録番号3(阿部安成ほか「香川県大島の療養所に展開した自治の痕跡—療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第10巻第1号, 2013年, に同史料目録収録)。

つて下るのだと思ふと、つくづくと働いて下る人の有難さがわかつた。もとの小屋へ帰つて見るともう先生も女の子も来て居たので先生と山へ、遊びに行つた。／途中で岡崎君が／「アツ、あしこにぐゆみがなつて居る」／、と言つたので皆とそこへ行つて取つて居ると、上の方から先生が／「此処にもたくさん有るよ」／と言つて知らせてくれた。／すると皆が、いつせいに其の方へ飛ぶように走つて行つた。そして、一生懸命でちぎりながら、ポケットへ入れる物もあれば、其のまゝ口へ入れて食べる物もある。よく見ると、中には、しぶいしぶいと言つて顔をしかめながら、食べてゐる物もある。／もう帰へらなければいけない頃だろうと思つて居ると、下の道の方から、／多田先生がもう大分遊んだから帰へろうと言つたので、僕達は先生と一しよに帰へつた。帰つて見るともう、お父さんや、お姉さんが弁当の用意を、／してくれて有つた。僕達はそれを、いたゞいて、庭にむしろをしきそこで、よばれた。腹がすいて居たので、お茶を飲むだけでもあいしいまして、にぎりめしを食べた時は特別の味で有つた、あの時の味は今でも忘れられない程、おいしかつた。其の後で又、先生と、小島へ浜から貝掘りに行つた。／掘りながらもう帰る頃だらうと思つてゐると、うしろの山の方までお父さんがわざわざ／「オーイ舟が出るから早く帰れよう」／と言つて呼びに来て下さつたので、僕達はすぐかけあしで舟まで帰へつた。それでようやく間にあふ事が出来た。それから持物や荷物を運んで舟に乗つた。いよいよ少年舎へ帰るのだと思ふと何だかさびしく又、たよない感じがした。しかし家へ帰り疲れた体を、ゆつくり休める事が、出来ると思へば嬉しいようでもあつた。／以上、

——「いよいよ果樹園へ遠足に行く事になつた」といっても、そこは島内だった。

山上の「果物」もみよう——

おぢいさんの家には、いちぢく、みかん、柿、

ブドーがある。いちぢくは三本あつて、西洋いちぢくでとてもあまくてうまい。僕は、いちぢくが好きだから、行くとずいぶんたべる。多く取れた日には、一日に八十三もあつた事がある。普通の日でも四十位は取れる。内ではお父さんとお母さんと僕しか好きでないから、たくさんたべられる。みかんは多くあるので、かぞへた事はない。みかんは僕も好きだ。僕は柿も好きだが、今年は植えかへたら、一つもないさうだ。それに植木屋が下手だつたから、枯れるかも知れないと云ふ事だ。こんなに良い柿が枯れたらおしいと思ふ。ブドーはなる事はなるが、ちよつと薬みたいな^{アジ}味がするのでまづい。ブドー棚はあまり大きくない。僕が大島にくる時は、果物にかぶせる、ふくろを作りにつたと云つて来たのであるが、今思ふと大きなうそであつた。併し〔下線部欄外の異筆〕僕はこの頃ふと、本当にそこへいつてゐるやうに感じて、／故郷が恋しく^{コヒ}なる／ああ、なつかしい故郷よ／をはり彼の故郷はどこなのだろうか？——大島から遠いのか近いのか、いまはだれがそこにいるのか、おぢいさんは健在か？。いま大島にいて、かつての「大きなうそ」を確かめ、また、「この頃ふと、本当にそこへいつてゐるやうに感じて、／故郷が恋しくな」っている。

もうひとつ、赤松の「雨」——

此の頃は梅雨に入つた様にうるさく雨が降ります。降つてはやみ、止んでは降り、野菜に取つてはなくてならぬ雨ですが、私達に取つては雨とは気が合はない様です。それは外に出て自由に遊ぶ事も出来ず又神経痛をわづらつて居る人は雨が降る日にかぎつて神経痛がします。それらの事で雨が降るとあまり喜びません。又それと反対にお百姓さんに取つては喜びます。私は雨が降るとあまり喜びませんが夜の寝て居る時に雨が降るとなんだか気持よく眠れます。それは子守歌を歌つて居る様に聞こえるからです。今島に成長して居る野菜はどんなに喜こんで居る事でせう。

目に見える様です。

雨とは気があわないと記した赤松。それでも夜の雨は、それこそリラクゼーション効果ありというところか。雨は嫌い、と否定したわけではなかった。

後記 謄写版刷り原稿用紙に記された「後記」——

空襲警報発令下の六月一日朝心多忙しき中に青松第九号の編輯をした。今回は論文は無く皆軽い気持ちで書いて居る、井上、土谷、小見山、斉木の諸兄の文章。それぞれに個性があるが巻頭には井上君の「戦友愛」、土谷君の駆虫、面白く見た。長田兄が病気の為に原稿を頂く事が出来なかつた、然し大分良くなつたから次号には書くとの事、全癒を祈る、短歌には浅野、綾井、小見山、泉、赤沢の諸兄の投稿あり、嬉しく思ふ、俳句は喜田兄〔「吉田」といったん記して「吉」に抹消線、その右欄外に「喜」〕一人は寂びしく思ふ。俳人諸氏の発憤を乞ふ。敵機の来襲昼夜の区別なく。宮城。大宮御所。各宮家。炎上を初め帝都の心臓部が焦土となり。沖縄戦線又紛戦と聞く。今にして起たずば。何時の日に起つか。病者と言へ「み民われ」大君に凡てを捧げむ。決意を新たに持場を死守すべきである。青松同人諸兄文芸報国に全力をそゝぎ園内向上の一翼となろうではないか、児童作文を面白く読んだ。浅野、赤沢、多田先生に希望。児童に。短歌、俳句、童謡を教へるとよい。次号からは輪番で短歌の批評をやつて見たいと思ふ、本格的に夏となつて来た。暑いと言はないで大いにがんばつて下さい

署名はない。長田の病状はいかに。次号に寄稿はあるか。

手紙 「No.」「年 月 日」「120」の文字と縦破線罫が印刷された罫紙に記された文章は通信文か——

早速御返事二預りまして難有う御座いました、附きまして注射をするのには大楓子油が第一との事、該薬品は境市岡村兵衛薬店にて買入

るとの事二御座候へしが堺市は市街の事ですから何町何丁目であるかを御教へ被下度御願申ます、尚御手紙二依りますると四百五十グラム入の瓶のせんをぬき。堅ク栓をして上よりガーゼ二てをほひとありますが栓をぬきたるまゝガーゼをかけ湯の中へ入れるのではないのでしょをか、亦始め二三時間位ボとボと煮るのですか、一寸御尋ね致します／実は種々御親切なる御手紙二接しまして大島へ入院致たきと存ますれと家庭之事情二よりまして只今の処外出致難く御座いますので乍勝手自宅療養を致し度存ますので薬の方法を教へて頂きます事で御座います、何分共宜敷御願申上候／勿々／太田垣益一殿／上太川庫一

このとき大島に太田垣という名の療養者がいたことは、たしか。彼とこの手紙の発信者との関係がわからない。詳細は不明ながらも、家庭の事情で療養所に入れず自宅療養をするという事例をあきらかにした記録がめずらしくあり、そうした病者から大楓子油について療養所在園者に尋ねることがあったとわかる記録もそうそうないだろう。

回覧順 この手紙を反故として、その裏面に「廻順」が記されている。「井上／笠居／大塚／松田(47)／斉木／小見山／長田／谷本／熊野／喜田／浅の、赤沢／泉／松本／戻り土谷」。笠居と大塚のあいだにおおきな矢印が記されている。

青山莊主人 この第9号は、表裏双方の表紙が『松の花』のためにつくられた表紙の厚紙を使っていて、それによる裏表紙にじかに、青山莊主人による稿が貼りつけてある——

青松も約半年で九号が出た。急迫した状況の中に生れ出る、生長して行くのを見守るのが嬉しい。装釘一つにも浅野兄の潔癖が見られ、笠居兄の手堅さが見られる所、矢張り印刷誌に見られぬ面白さがある。／井上兄の戦友愛よく纏って居り島を愛する真情が溢れてゐる。有難く読んだ。／土谷兄の駆虫、楽に書けてゐる。楽しんでよめる。歌も楽しい。／煙草

の火ともどもわかし新入の挨拶交はす病室の
昼／七日間吾が身横たふ寝台のきしるが親し
ゆさぶりてみつ／この二首特に面白く思った。
ころんでも只是起きぬ男である。／笠居兄の
御努力に打たれる。正に二三十才代の勉強で
ある。努力のあるところ必ずよき果が得られ
やう。監視哨の歌が多い。奉仕奉公が人生の
最も楽しいものである事を教へられる。喜田
兄まで久しぶりで時局下の息吹をはく。最初
の三句など感銘す。松田兄のはあとの奉仕が
良い。会話の使駆が活々してゐる。／小見山
兄の一文は最も感激を与へた。第一不自由な
中でこれだけのものを書いて下された事、青
松が如何に皆から愛撫されてきたかを示して
ゐる。／(兎も角皆がこんなに勢ふて書くこ
とが一番良い。大に新人もさそふて)〔下線
部はのちの追記か〕／批評も面白い。浅野兄
の長歌では刀を鍛へる処を詠んだものが一番
心に残って居る。素張しかった。併し努力の
点で感服しない事は一度もない。／中へ入る
古雑誌がどんなに皆を楽しませてゐるかを
知ってうれしい。「山の様に古雑誌があつて
持余して売り払ひましたよ。」と三木兄が口
惜しさふに先日述懐された。不自由な方の読
書の困難さを沁々教へられた。そう思って放
送読書会も考へたが時局下一寸ものになりさ
ふもない。たまに小生が十五分位よんであげ
たいと思つてゐる。小見山兄には誰か原稿口
述で代筆して上げたらと思ふ。／齊木兄も良
く書いて下さる。短かくてもよいからよく頭
で整理しておいて書く様にすると労が省ける。
〔下線部は原文で赤インクによる傍線〕／子
供の綴方については若葉にゆづる。大西君の
遠足よくかけてゐる。山上君の果物の一文の
終り／「僕が大島にくる時は果物にかぶせる
ふくろを作りにいったと云ふてきたのである
が、今思ふと大きなうそであつた。併し僕は
この頃ふと本当にそこにいつてゐるやうに感
ずる」／この一節は何と云ふ新鮮さ何と云ふ
活々しさであらふ。大人が若しこれだけの驚

異を感動を胸に湧かせたらどんな立派な短歌
俳句が出来やふ。所詮子供は大人の父である。
美しいそれこそもぎたて果物を掌にのせた様
な気持でこの数行をよみかへし筆を擱く。／

5/VII 青山莊主人

やはり監視哨の歌の多さは、読むものにあきら
かだつた。手書き手づくりのメディアは独特の、
固有の記録として、戦時に生きるときのひとつ
の髓となり、また戦時を生きるときの旨のあり
ようを示していた。メディアを手づくり、それ
が在園者たちの戦いとなつた。

第10号 ^{おもて}表表紙には、太く素朴な筆による
題字「青松」が右から左への横書き、「昭和
二十年七月一日(第拾号)」と右端に縦書き。
第10号の日付が1945年7月1日、第8号が同年
5月15日、前号第9号の「後記」には「空襲警
報発令下の六月一日朝心多忙しき中に青松第九
号の編輯をした」との記載があつたので、表表
紙に年月日が記されていなかった前号は同年6
月1日から旬日のあいだにだされたときとみてよ
いだろう。およそ月刊が維持されている。

題字したには、「大島風景の／写真を入れま
す／山口技師の好意で／いたゞいてゐるので／
あります」との鉛筆書きがみえる。四隅の2つ
には、写真を留める枠が残っている。実際に写
真は載つたのだろうか。また、左うえに貼られ
た紙片には、「園長スミ／高橋医スミ／婦長／
岩崎緑雲スミ／10日夜／看護婦控室11日12
日／13日あたり／詰所石本兄へ／大野スミ／
林文」と記されている(大野と林の名は丸で囲
まれている)。回覧が同人以外にもまわるとい
うことか。それはこの第10号にかぎるといふ
ことか。

目次 表表紙の裏に謄写版刷りの原稿用紙
が貼られ、そこに目次が記されている——

「青松」第十号序／巻頭言 (一)／園長先生
を稿ふ夕 (二)／放送作品 (一二)／豚と
南瓜 高野六郎(三二)／随筆 土谷、浅野、
齊木、笠居、小見山(自三六／至六〇)／短
歌作品 短歌会同人／俳句作品 俳句会同人

(三二／三四／五四)／自句自解 喜田正秋
(七一)／詩 松田美津夫(七二)／青松九号／
短歌作品合評(七六)／青松園の俳句 林東
風(七九)／あとがき(八四)

そのしたには、だれかのデスマスクか、その写真が貼ってある。

序 目次にいう「「青松」第十号序」にあたるところとなるのか、まずこの号には扉があり、謄写版刷りの原稿用紙がそれにあてられ、「昭和二十年七月一日／青松 第十号」とペン字があり、つぎのキャプションがつかない写真の被写体は、国立療養所大島青松園園長野島泰治とおもわれ、そのつぎに「み民我れ／勝抜く誓ひ／高らかに心の結び／堅めざらめや／野島」の1首がある。「野島」の文字は、書判のように様式化されている。

続べられる 署名がない「巻頭言」——

皇軍に統帥権があるのと同様、吾らの療養生活は園長先生を通じて畏くも上 御一人に帰へし奉る。園長先生は叡慮を体して、吾らの療養生活を続べられるのであつて、鴻大無辺の御仁慈は園長先生を通じて、吾らの上に光被する。／蓋し、決戦下、園長先生の御労苦は絶大であらう。吾ら一同常に万腔の感謝を捧げる処であつて、はからずも一夕の催しを得微衷を披瀝する機会の与へられたことは望外の幸せであつた。一同は感謝の念を愈々深めると共に、先生の御健勝を心からお祈りした次第である。

と、ここには、ほぼ対面することの不可能な天皇と、日々接する可能性だけは確実にある園長とが重ねられ、自分たちを続べ、「御仁慈」をもたらし、光を照らすものへの謝恩と奉公とを果たそうと構えるものたちがいるとみせられている。

園長を そのつぎの稿の扉があり、「六月二十六日十九時半より／“園長先生を犒ふ夕”(所内放送)／職員、療友／国民学校児童一同」と記してある。

風さへ絶えて、降り出しさうな梅雨空の下、

瀬戸の小島はいと静かである。窓の松籟も、海岸の潮騒も、今宵の放送を聞かんものと、鳴りをひそめて待つてゐる。／六月二十六日十九時半——／ヨ定の時刻が迫ると共に、先生に引率され出演児童が続々つめかける。／五人、七人、喜色満面。身一つが親しく園長先生につながると思ふ感激に、胸をわくわくさせてゐる。園長先生に親しく日頃のお礼が言へるのだ。／十九時半——／事ム官の御挨拶によつてスイッチが切り替へされる。山口技師の御尽力で、ラジオの調子も上々である。／司会は三木アナウンサー／先づ総代さんの御挨拶が始まる。／「青松園のけふあるは、一に園長先生の御努力のお蔭である」／「常在戦場、常在空襲とも言ふべきけふ、園長先生をこの島にいたゞくことは、どんなに心強いかわからない」／と、かつての外島保養院の風水害に於ける原田院長先生の例をひき、最後に療友一同に代つて満腔の感謝を捧げられる。／以下／唱歌／讃辞／短歌／俳句／綴方／少年歌(林先生作曲)／と、滞りなく終つて、再びスイッチが切り替へされる。／第二国民学校児童による児童劇「小野道風」が、爽かに送られて来る。／“雨々降りやれ／ざんざんと／降りやれ”／と、歌ふあどけない歌声と共に、柳糸に飛びつく蛙を眺めて悟つたといふ道風の訓へは聞く者の全てに深い感銘を与へずにおかなかつた。／義広さん／康司さん／勝さん／信子さん／悦子さん／博一さん／真さん／温子さん／ほんといよ園長先生がこの島にをつて下さることが嬉しいですね。／園長先生の謝辞／「時局下、第三者のとても想像も出来ぬ不自由があると思へば、ほんとに相済まなく思つてゐる」／「この記念すべき夕べをいたゞいたことによつて、一層力をつけられた思ひがする」／「一切の心と力を結集して戦力化し、この難局を切り抜きたい」／と、一語々々に力がこもり、「新なる覚悟を以て」と、一層の協力方を要請される。／療友一同、拡声機の前に端座して、

一語のがさじとき、耳立てる異常な緊張の裡に、園長先生の謝辞が終ると／最後に事ム官から／「職員の方で当然催すべきを、皆様にしていたゞき、実に恐縮に思つてゐる」／と、御鄭重なお礼の言葉をいたゞいたことは却つて此方こそ赤面のいたりであつた。／そして、この一夕の催しに、／高橋先生／林文子先生／を始め、山口技師から絶大なかけの御努力をいたゞいたこと、事ム官の放送で始めて知り、ほんとに「拳島一丸」といふ言葉を思ひ、温く、親しく、明るく、清く、睦くてなごやかな青松園に療養出来る身の幸を、放送が終了した後までも久しく、一同は語り合つたことである。／“二十六日夕の「放送文芸」をこゝに蒐録し／皆様と共にあらためて／園長先生の御労苦を偲び／一層感謝の念を深めたいと思ひます。”／(蒐録は放送順による)〔引用者による下線部は、原典では太枠で囲われている。囲み線は「潮音」と題された稿にみえるそれにおなじ〕

詳細は不明ながらも、この時期なにかしらのきっかけで園長をねぎらう企画がもちあがり、それを実施し、そしてその記録が本号となったのだろう。園長のもとで「拳島一丸」を目指す機会が設けられた。

その裏面 この号には、とおしのページノンブルが記されている。その6ページと7ページの裏面が、謄写版刷りの文書だった(原文の漢字カナを、漢字かなとした)。前者——

自治会規則及規定改正並新制定案／自治会規則中改正案／第十一条中 炊事監督一名の次に「治療室監督一名」を加ふ(役員の種類)〔引用者による波下線部は、原文では手書き。以下同〕第十二条 第四項として「治療室監督は医務員並常務委員会の旨を享けて治療に関する事務を掌るものとす」を加ふ(各役員の任務の大要)／第十五条 炊事監督の次に「治療室監督」を加ふ(役員選任の方法＝一般選挙)／右理由＝治療室監督を新に置くことに依る／常務委員会規定中改正案／第三条中

人事部の病室監督に関する事項の次に「治療室監督に関する事項」を加ふ／右理由＝治療室監督を置き人事部に属せしめたるに依るここにいう「改正並新制定」とはいつの時期におこなわれたのか、また、「治療室監督」という役職を設ける理由、背景、目的はなにだったのか。

後者7ページ——

選挙法規定中改正案／第三条中 六種とあるを七種とし炊事監督の次に「一、治療室監督 ■票用紙」を加ふ／右理由＝新に治療室監督を設けたるに依る(各役員選挙用紙種別)／作業規定別表改正の件／作業規定第八条による別表一号中に「治療室監督」の一項を加ふ／右理由＝治療室監督を新に設けたるに依る(役員手当表、／月手当壹円八錢)

子と 大塚一の稿「小品文」は表裏が反転し、稿の後半にページノンブル12が記されている。目次ではここは「放送作品」だった。

一鯨鯨／協和会は全療友の魂である。近頃軌道に乗って愈健全な発達をとげつゝあるのは真実に欣ばしき事である。併しこれまでは色々の人から悪口も云はれ強迫もせられた。／これ等の悪口や強迫に処して尤も宜く理解し保護指導して下さつたのが園長先生である。／協和会は最早患者の物では無い。／園長先生を中心とする青松園全体の物である。／私は拾数年の永きに互りに島してゐる。其の間園長先生に接し屢御意見拝聴の期会を得たが其の度事に園長先生程真剣に吾々の幸福の為に考へて下さる方は無いと云ふ印象を深く々々受けた。／随分我儘な且つ勝手な御願ひをした事もあつたが、いつもニコニコとして愛撫の手を差延べて下さつた。／「或る人は私を鯨鯨だと云ふ。幾何にも其の通りだ。病とは云ひながら寝た儘大口を開けて餌を待つてゐる計りであつたからである。(十二頁へつゞく)〔引用者による点下線は原典本文と異筆〕／病室の軒に雀が子を産んだ。親がせつせと餌〔改ページ〕を運んだ。此の子雀

が近頃巢立し、然ら親の苦勞を知らぬげに飛び廻つて居る様である。吾々は園長先生の御慈悲に対し何やら鮫鰐や小雀に似たものが有る様にも思はれる。／小雀が親の^{ヤツ}憔悴に巢立ちけり〔「肥り」に抹消線が引かれ「巢立ち」と記されている〕／二、でく廻し／「又馬鈴薯^{イモ}か」と云つた時代は昔の夢だ。小さな片らでも今は千金の味はひがある。／時局柄の心得はあるが具すれば忘れ勝である。阿波の祖谷^{イヤ}にはでく廻しと云ふ事がある。馬鈴薯を箸に突き差して暖かいうつを吹き々々戴くのである。／今日も又私は其のでく廻しをやつたのだが、あまりの美味しさにモ一つと云ふ心持を断ち切れなかつた／足らで足り残せし馬鈴薯の^{ウマ}美味げなる

「協和会は最早患者の物では無い」といいきるとき、それを可能としたのが、「園長先生を中心とする青松園」があるといえるからであり、そうであるからこそ協和会(自治会)が「全体の物である」ととらえ直せたのである。

穂波生 前第9号では寄稿を休んだ長田穂波の原稿は、「園長^{おとふさん}をたゝふ！」と題された。

お父さん、あなたは医師として、春秋に富む華やかな、人生前途の青空にそむきて、若き日に早くも救癪の爲め献身して、此処大島の雨を忍び風に処して、私共のために夜も昼もお尽し下さいます事は、深い感謝でござゐます。／特に——協和会の患者自治精神が社会の誤解をうけ其制度が排斥されました苦境時代にも——私共を深く信頼下さいまして矢おもてに立て援護下さいました……親心は忘れられませんが……そして斯の理解と育成の親心を終始、何事にも変りなく御注下さいます。／又、多忙の中にも更に——医療方法に熱心御研究になり其成績一方ならずと承知いたして居ります。昨年の香川地方に大流行の

赤痢も日頃の御研究の方法を応用せられ、以てサレモ悪性の赤痢も、たちまち撲滅して県民を救はれし事も承り。大なる貢献なされ、功德をたてられし由、誠に有難く——この御研究のおうで前は私共の前途の光明として仰ぐ、力強きものでござゐます。／開戦以来は多事多難の癪療養所各方面に渡り——一再ならず全国癪園を代表して中央との御交渉に当られ——よりて私共全癪者の上に如何に大なる幸福をもたらされつゝある事でせうか……。／お父さん、あなたの御恩は深く、御徳は高くあります……然し私は平常あまり、おほめ申上ません、それは他人らしく成る恐が感じられるからで……寧ろ心と心との深い無言に真の親子の情を味ふからであります。／然し、今夜は特別——お父さんをたゝふたで——短い時間、とても意を尽し得ませんが日頃の感恩と尊敬の一端を申上で……我らの慈父野島園長をたゝゑるものであります。／おはり

表題にある「園長」の語にふられたルビ「おとふさん」が、いまこれを読むものたちの目を射抜くように感じる。療養所におけるいわば「家族主義」というべきようすや仕組みは、同時代の療養所の記録でも論じられ、現在の研究者が療養所を議論するさいのひとつの論点ともなっている⁶⁾。大島の療養所では、そうした擬制がどのようになっていたのか。ここまでみてきたところでもあきらかなとおり、本号は「慈父」である「園長^{おとふさん}」に捧げられたとみえるのだが、なぜこの号なのか、なぜこのときだったのか。

ただし、穂波生は園長を父、しかも慈父としたのだったが、そのまえの稿では、かならずしも園長と父をぴたりと重ねていなかったところがある。なぜか——それは天皇が国父だからであらう。穂波生はまた、園長をねぎらう、を、

6) ひとまず、阿部安成「長島を開く、長島が読める—国立療養所長島愛生園所蔵史料の公開」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.152, 2011年7月)、同「長島が説かれる、長島を論じる」(同前 No.155, 2011年8月)を参照。とくに、そこでとりあげた松岡弘之の議論が参考となる。

園長を讃える、とかえてしまっている。こうした点に気をつけておこう。

さて、例によって長田穂波の稿は、「KYOKUTO 10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙の裏に記されていた。本来の表^{おもて}には、ページノンブルが19などと手書きされて、キリスト教信仰にかかわる文章が、長田のペンで記されている。

人 柱 今井比沙志の稿には「園長先生」の題がある。

園長先生は碁、将棋にとっても弱いと聞いてゐる。恐らく園長先生位なら、病友間に二百人も居らう。それほど強くないのである。しかも待つたが多くて、五手も七手も後がへりされる。しかも深思黙考、数刻にも及ばないと、一手も軽々しく打たれないと聞かされた。たいていの相手は先づこのねばりに負かされる。正に天下一品である。／この事をきいた時、私はとても嬉しかつた。と、いふのは、親しみ深いこの園長先生が、吾々の園長先生であるからである。／園長先生が将棋を指されてゐる様を、静かに想像して見て下さい。思はず笑ひたくなるではありませんか。どんな無理も言へさうである。慈父と仰いで甘へてみたい。将棋には弱くてもよい。いつまでも吾々の園長先生であつてほしい。吾々は安心していたつきの身をゆだねよう。このやさしい園長先生の下でこそ、吾々の一人々々が、今こそ青松園の人柱となるの覚悟を新にし、来る日来る日を立派に戦ひ抜かう。そして、沖縄の仇は打つとめいめいが殺く固く胸に誓はうではないか。

彼の稿は、「大島青松園薬局」の「内用薬」票の裏面に刷られた原稿用紙を用いていた。3枚ある「内用薬」票のうちの1枚には、今井比沙志の名が記されていた。へぼ将棋といってよい園長の腕前が、彼が「慈父」であることのひとつの証と活用されている。そうした「慈父」がいるのだから、「今こそ青松園の人柱となるの覚悟を新にし」得るということだ。

短 歌 ページノンブル18と19には、「短歌」と題がついて、4名による10首が載る。

泉俊夫／病み生くる吾等の為に尽します／日日を思へば勿体なくも／ひたすらに尽し給へる園長に／報ゆる事もなくて生きつゝ／綾井譲／いつくしみ給ふ心のかたじけな／かりそめならぬ縁を思ふ／父母の我れになれば死の極に／誰が名を呼ばむ礼を申さむ／笠井誠一／声あげて讃むるも何か空々し／みいつくしみの深さ思へば／蛙鳴く声^{ホガ}を朗らに聞きにけり／慈父の勲を讃むるこの夕／枕高う寝る勿体なさ真夜中の／床に跪坐りて祈念久しき〔改ページ〕小見山和夫／いつくしみ賜ふ篤きに甘へつゝ／苦しき日日は嘆かむとしつ／世にへだつかなしき者を護り抜くと／日夜わかつたぬ労苦を慈父は／たとふれば春日のごともあたたかく／常にし在ます大きわが慈父
これらもやはり「園長」「慈父」の詠歌だった。ページをくってゆくたびに、園長の「慈父」のどあいが高まってゆくようだ。そして、その父の慈しみにどう「報ゆる」のか、「報ゆる」ことができるのかが、自問される。

その裏面 本誌ページノンブル18と19の裏面は、これまでの号の誌面にもみられた、療養所自治にかかわる規程類だった。謄写版で刷られたそれらを、ページノンブル18、19の順にみよう(原文の漢字カナを漢字かなとした)。

一 会計諸帳簿の整理保管に関する事項／
一 詰所備品及消耗品の保管並出納に関する事項／人事部／一 風紀及衛生に関する事項／一 互助金及入院見舞金に関する事項／一 室員配属に関する事項／一 入退園者及一時帰郷者に関する事項／一 給与品に関する事項／一 貸与品に関する事項／一 天然物及記念物の保護に関する事項／一 拾得物及紛失物に関する事項／一 褒賞及制裁に関する事項／一 其他人事に関する事項〔ここまでが謄写版刷り面のページノンブル7〕／
〔ここからが謄写版刷り面のページノンブル8〕作業部／一 各種作業に関する事項／

一 作業の監督指導に関する事項／一 営繕
及修繕に関する事項／一 作業器具の整理保
管に関する事項／一 個人営利取締に関する
事項／殖産部／一 養鶏に関する事項／
一 養豚に関する事項／一 養兔に関する事
項／一 果樹園に関する事項／一 農園及花
園に関する事項／一 農具の整理保管に関す
る事項／〔ここからは謄写版刷り面にページ
ノンプルなし〕室長規定／第一条 各家族室
に室長一名、副室長一名を置く／第二条 室
長及副室長は自室に於て互選し総代の承認を
経るものとす／第三条 室長は総代の旨を享
け自室を統裁し左の事項を処理するものと
す／副室長は室長を輔佐し室長事故ある場合
之を代理するものとす／一 風紀取締に関す
ること／一 衛生に関すること／一 備品の
保管営繕に関すること／一 作業者の申請及
監督指導に関すること／一 互助金受領者の
査定及申請に関すること／一 給与品に関す
ること／一 聯合奉仕団員督励に関すること
／以上

大和丈夫 「園長讃歌」と題された齊木操の
稿冒頭には「自作自解」と記されている。

御慰安などと柄にもなく術べも持たざる故、
無限の感謝を無智の心にのみよる外なく拙歌
に託し感恩の一端となさんのみ……／男の子
やも言挙げもなく世に離り癪者守りつつ忠な
らんとす／歌の意は「世の総ての名利を顧る
こともなく、その功を誇るべく言挙げもせず、
華々しき世の中より遠くかけ離れた孤島に甲
斐なき病者を慈み憐みて、ひたすらその天職
を守り抜き、以て己が忠節全たからんとする、
その謙虚にして純忠至高なる面影こそ誠に大
和男の子の象徴であり、丈夫らしきことよ
…」と云ふのであつて、これは勿論園長殿の
至尊の御姿であり、御精神を拝して、病者我
等の置く能はざる感銘を詠じたものであつて、
決して通り一片の御世辞に非ざるを断じて憚
りません。／それは作者が十年に余る不断の
御恩寵に浴し、心根の奥深く根差してゐた感

恩萌芽の発芽に外ならないから……基より園
長殿ほか総ての職員の皆様が斯くあられるこ
とも凝ひもなき事実であつて、／畏き「徒々
の御歌」の御聖旨にこよなく忠実であられる
皆様は等しく「忠ならん」の道を御実践下さ
れる「真の大和丈夫」であられることは申す
までもない事であつて、この歌の底にはこれ
ら総てに対する無限の感謝と、崇高至純なる
姿への尽きせぬ讃仰と敬慕と、尚又、我ら自
づからへの内省等、複雑多岐な感懐をも併せ
含めてゐるつもりであるが、如何んせん凡愚
の作、充分意を尽し得ざるを残念に思ふ次第
です。／かかる世にかかる療養続べたまふ上
晴れもなき苦衷を拝す／この歌は「かかる難
局に処し、かかる特殊な島を統べ行くことの
如何に地道にして心労のみ大なるかを想ふ時、
我等は如何に謝し、如何にお応へすべき
か？／不省の子として私達は全く其の術も知
らない——唯々、深くその御心苦を謝し、御
厚情を拝すのみである」と云ふのでありま
す。／以上、稚拙ながら以て園長殿御慰安の
詠草と致します。(終り)

園長を讃える解説つきの歌だ。

その裏面 齊木の稿にはページノンプル20と
21が記され、どちらもその裏面が、やはり謄写
版刷りの規程類の一部である。ページノンプル
20の裏面は、規程類の目次か(項目とページ数
をむすぶ野線は短くした)。

会計部／会計細則——二五／予算細則——
二九／互助拠金細則——三八／人事部／室員
配属細則——四一／少年室少女室細則——
四四／籍元細則——四七／互助細則——
四八／一時帰郷退園細則——五一／婚姻内縁
細則——五三／被服寝具細則——五五／天然
記念物保護細則——五八／拾得物紛失物細則
——六〇／褒賞細則——六一／制裁細則——
六二／作業部／作業細則——六五／個人営利
細則——七〇／殖産部／殖産細則——七三／
農産物納入細則——七四／花園細則——
七五／購買部

ついで本誌ページノンブル21の裏面が、謄写版刷り面のページノンブル12と13となっている(原文の漢字カナを漢字かなとした)。

隣組細則／第一条 隣組配置は之を別表に定む／但 重特定室、少年室及少女室は特別区とし隣組長を置かざるものとす／第二条 隣組長は室長副室長常会又は室員常会を開催したるときは其日時、参加人員、協議事項、申合実践事項等を総代に報告するものとす／第三条 総代は必要と認むる場合は隣組常会に対し常務員を参加せしむることを得／第四条 室長副室長常会又は室員常会に於て協議したる事項は協力会常置委員会の審議を経て協力会の議題とすることを得／第五条 隣組長は必要ありと認むる場合は相互申合せの上総代に届出て聯合室長副室長常会を開催することを得／第六条 隣組に対する助成費は室長副室長常会又は室員常会に出席したる人員数等を考慮し之を査定するものとす〔改ページ〕

第七条 隣組長は室長副室長常会又は室員常会に関する記録を作成保存するものとす

俳句 さきの「短歌」同様の謄写版刷り縦罫紙に、「俳句」の表題があり、4名による9句が記されている。

太田井春峰／走る娘を追かけ去りぬ夏の蝶／戸口まで来て直ぐ去りぬ夏の蝶／藤田薫水／菖蒲ふくや愚かを妻に詫びにつゝ／御奉公のならぬは淋し菖蒲宿／月あげてなほ面広し棉の花／熊野桜香／翼賛の汗もうるはし平和郷／慈父一人蚊長に安けき子沢山／喜田正秋／滯笹にたゝみくるなり卯月浪／打寄せる卯浪のなかの標識灯

その裏面 「俳句」と題された稿の裏面がやはり規程(原文の漢字カナを漢字かなとした)。謄写版刷り面のページノンブルは38と39。

聯合奉仕団規定／第一条 奉公の実践を統制強化するため聯合奉仕団を設く／第二条 本団は総代之を統裁するものとす／第三条 本団は之を警防団、青年団、婦人団に分つ／第

四条 警防団は二十六歳より三十五歳までの男子普通室配属者を以て組織し警備、教化、訓練、救護、其他の奉仕に当るを以て目的とす／青年団は十六歳より二十五歳までの男子普通室配属者を以て組織し教化、訓練、奉仕に当るを以て目的とす／婦人団は十六歳より四十歳までの女子普通室配属者を以て組織し婦人としての教化、訓練、奉仕に当るを以て目的とす／第五条 本団に教化部、訓練部、奉仕部を設く／第六条 本団に左の役員を置く／聯合奉仕団長 一名／〔改ページ〕警防団長副団長 各一名／青年団長副団長 各一名／婦人団長副団長 各一名／幹事 若干名／第七条 聯合奉仕団長は総代の旨を享け団務を統率するものとす／警防団長、青年団長、婦人団長は聯合奉仕団長を輔佐し、警防団長は警防団員を、青年団長は青年団員を、婦人団長は婦人団員を統率するものとす／警防団副団長は警防団長を、青年団副団長は青年団長を、婦人団副団長は婦人団長を輔佐し其事故ある場合之を代理するものとす／幹事は聯合奉仕団長及所属団長の指揮を享け団務を処理するものとす／第八条 聯合奉仕団長事故ある場合は警防団長之を代理するものとす／第九条 聯合奉仕団長は団員の互選とすさきにみたとおり、本誌前号第9号には、「聯合奉仕団細則」の裏面が用いられていた。ここにある「聯合奉仕団規則」とあわせて、同団の基本編制がわかることとなった。

子どもたち この号では、子どもたちの作文もまた、園長を讃えている。高2戸田次郎「園長先生」、初5中井八千代「園長先生」。中井の作文をみよう。

私は。園長先生が大好きです。／園長先生は、私達をしやわせにしてください。いつも、おいそがしいので治療室へは。あまりお出になりませんが、式の時はきれいな、服をきてお見えになり、ニコニコしながら、私達のためになるお話をして下さいますので、園長先生が、お見えにならない式は、なんだか淋し

い気持ちがいたします。／又、園長先生は、私達の病気を一日も早く、なほして下さい、お考へでいつしうけんめいに、お薬の研究をしていらつしやるそうです。／私は、うれしくてうれしくてたまりません。本当に園長先生はいろいろの事を心配して下さい私達のおやさしい、お父さまです。私達は園長先生に少しでも御心配をかけないようにするため、心に神風を吹かせ、お姉ちゃんや学校の先生のおつしやる事をよく守り一生懸命に勉強致します

子どもたちからすれば、園長の「お父さま」であるどあい、子どもであるがゆえにいつそう高かったのだろうか。

劇 本号のおしページノンプルの26のところは、白紙となっていて、その裏面に、「配役／小野の道風 木村義広／その従者 勝瀬康司／甲の朝臣の弟子 木村勝／乙 〃 〃 貞森信子／丙 〃 〃 木村悦子／丁 〃 〃 木村博一／蛙の歌 林真／雨の歌 林道子／解説 浅山温子」とあり、つぎのページノンプル27から30までが謄写版刷りとなっていて、これが「^{をの}小野の^{たうふ}道風」と題された脚本だった。

この脚本には1から7までのページノンプルが打たれ、ノンプルのない最終ページには、ペン書きで、「出演人物／小野の道風 勝瀬康司／その従者 木村博一／お弟子甲 木村勝／乙 貞森信子／丙 木村悦子／丁 貞森修／解説 浅山ヒロ子」と記されている。さきの「配役」とはいくらか異なった「出演人物」一覧となっている。最後にある道風の台詞——「今迄熱心に稽古せず上手にならふとしてゐたのが間違つてゐた。何事も勉強だ、勉強だ」の箇所が観覧者や読者にうったえるところか。

鞆彦と小見山と太田井 ノンプル31が打たれたページには、白百合を描いた、「鞆彦」の署名がある絵があり(日本画家の安田鞆彦だろう)、原稿用紙の紙片に記された「征でゆきてたよりを絶えし面影の／清かに今朝は百合ひらきたり 小見山和夫」の短歌1首。

その裏面には、縦罫紙の紙片が貼られ、そこに——

青松俳句 太田井春峰／宵のうち蚤さぐりつゝ夢に入る／夕ざれば蚤かこちつゝ老早寝／便り書く手に来て止まる昼蚊かな／瓶を切る友等賑か夏座敷／新聞を読めば皆来る端居かな

の5句。

高野六郎 ページノンプル32から34までは、切りとられた活版印刷物で、その9ページのところに裏にした縦罫紙が貼られ、そこに手書きで「豚と南瓜／高野六郎先生らしい演題です、恐らく何の御準備もなく歩き乍ら考へられ登壇寸前にきまったかしやべられてゐる間にこんなことになったのでせう／先生の小篇、隻句にも先生の温情が溢れてゐるのを感じます、よんでゐて嬉しくなります、これは内田先生から送つて下された雑誌中のもの、内田先生は熊本の御郷里にかへられ大変御元気な由」。「内田先生」とは、療養所勤務医だが、ここにいう「御郷里にかへられ」は、一時帰省なのか。細かな筆の字は、林文雄の手にみえる。

活版印刷物のつぎのページ(10)に始まる「豚と南瓜／高野六郎」の文章冒頭に、「本稿は四月二十九日本社多摩川保養■落成式後開かれた日本医療団の高野先生の御講話であります、始め茂野先生が複十字会長に推され同先生の御挨拶があつてその後で高野先生のお話がありました(記者)」とある。「本社」は不明。稿の末尾には高野の肩書が、「日本医療団理事・医学博士」と記されている。

活版印刷物の最終ページには、さきの縦罫紙と同一であろう紙片が貼られ、これまたさきとおなじ筆で、「銀の年より／高野先生御夫妻の銀婚式歌集より、夫人のと半分半分の集也／まむかひの朝日の下の大島は一色にして何も見分す／日当る方より見れば大島は美しき鳥家の群見ゆ／玉もよしさぬきの海の朝なぎに悲しくわが見る島は大島／朝げはみて島の人らはあるならむ知られずわれは帽子ふるなり(昭和九年)」。

縦罫紙には、「長島愛生園」と印字あり。

蛙と潮音 ページノンブル35は、「大島青松園」の印字がある縦罫紙に記された、右が岩崎緑雲「蛙」7句、左が「潮音」——

潮音◎園況(七月上旬)／総人員五五七／普通室三一八、男二三三、女八五／特定室二三九、男一三一、女一〇八／作業希望者一九一、男一二一、女六二／作業点数一八四、補充七

これまでの号にもあったとおり、このページが園の現況を伝えている。

随筆 ページノンブル36からは、「目次」にいう「随筆」のページとなる。まずは、土谷勉「南瓜のはなし」。「てらた」の署名(か?)がある挿絵の紙片が貼ってある。つぎが、あさのしげる「胡瓜」(「六月二十五日記」)、斉木操「(随筆)／農園漫遊」(「二〇、六、二三記」)。どれも、たべもの、食糧が主題だ。あいだに喜田正秋の「俳句作品」をはさんで、小見山和夫「忘れぬうちに」、笠居誠一「汗」へとつづく。

これらのページには、切り抜きが貼ってあるところがある。土谷稿の最初のページの裏には三好達治「鳶なく」、あさの稿最終ページの下段に瀧口武士「草刈」、どちらも活版印刷。

「忘れぬうちに」と題された小見山和夫の稿は、「十行 廿字詰」「コクヨの165 規格 A4」の文字と枠目が印刷された原稿用紙3枚の両面6ページ分にわたる長編である(ページノンブル55から57まで)。

冒頭に転載した防人の歌から「世にいふ「鹿島立ち」」を説き、天皇諡号や元号の由来などへとペンがすすむものの、なぜ、「忘れぬうちに」なのかわからない。『万葉集』論を展開しつつ、稿の末尾で、「もつとくはしく書きたいと思つたが今の自分の視力では無理である」とみずからのふつごうを記した。小見山の目は傷んでいた。それゆえに、「忘れぬうちに」書いておく、ということか。

笠居誠一がかかげた表題は「汗」——「生れながらに百性田吾作の子である。私には百性の

楽しみも苦しみも一通りは知つて居る心算であつた」と始まる稿は、「然し闘病生活二十有六年の間に殆ど鋏を手にした事のない。私が去る日曜日の午後。千歳果樹園へ馬铃薯掘りの手伝ひに行つた」ときのようすを記してゆく。

小見山はもうひとつ「つぶやき」と題した稿を寄せた。『万葉集』論。ただ、「目次」では「随筆」が60までとなっていたところ、「つぶやき」はページノンブル60から64まで。

喜田俳句 随筆の稿のあいだに、「俳句作品」として喜田正秋の5句——「壕出づる子の手に光る椿かな／朝より雨となりたる立夏かな／山肌雲に雲たれこめて夏となる／おとろへて曳く雨細し夏の草／木洩日の下に幼々と李食む」。

その裏面には、活版印刷物の切り抜き——北村秀雄「玉蜀黍」が貼ってある。これも野菜。掲載誌は不明。

牡丹 小見山の「つぶやき」が終わったつぎに、「作者未詳(元末明初)／牡丹鳩図／(部分)」とキャプションがついた絵画の印刷物の切り抜きがあり、その余白に、ペン書きで「牡丹花は咲きさだまりて静かなり／花の占めたる位置のたしかさ 利玄」とある。木下利玄の短歌の添え書き。

子どもの絵 そのつぎが、「初五中井八千代」と裏に鉛筆書きのある水彩画で、虫と草花の絵がある団扇を描く。

若葉 絵の裏に、「祝、「若葉」の創刊」の題目がある、謄写版刷り原稿用紙1枚の稿が貼付。末尾に「土谷」の印影——

「若葉」が浅野君始め先生方の御尽力で創刊された。「青松」の弟であり、妹である。先生方の御苦勞に対し、私は心からお祝をのべたい。石清水のやうに澄んだ童心に、ともすれば濁り勝な大人の心を映して三省の機会を与へられた事が嬉しい。／先生方の今後の努力に俟つとして、私はこの企てを心から祝福すると共に、今後の発展を祈りたいと思ふ。／尚、児童たちは、先生がこんなよいものを作つて下さつたのだから、恥しくない立派な作品を

どしどし作ることである。／園長先生始め青松園のみんなの慈しみ深い目がいつも君らの上にあることを思へば、なまけたりなどしては相済みないことである。一生懸命勉強して、一生懸命よいものを書くことである。

「青松」の弟であり、妹」という『若葉』については、わからないことばかりで、いまのところ大島ではその現物はみつからない。

笠居短歌 笠居誠一「短歌」は16首——

夕茜消え残る明るさ宵待ちの花咲く浜に
松葉杖つきていつ／宵待ちの花咲く浜に松葉杖つきて仰ぐ故郷の山は霞める／受性終えし
南瓜の花初夏の日はやしほるるを降り立ちて見る／たくましく伸びる南瓜のつるに見るや
せほそりたる蟬螂の鎌／林先生の朗読を聴きて／遂にかも驛馬も人の真心の前には驛馬の如くなりけり／一杯の水に洗面すましたる將軍の意気既に敵呑む／一皿の白き空に箸そえし
当番兵に礼を返へせる／沖縄につゞく潮と朝の磯に汲みつゝ、想ふ紛戦の語を／み戦のいかしきなかに今日ありて必勝の念いやまさり来る／馬冷薯の出来を讀むればこちらむく大の眉毛は既に抜けたるき笑ふ男の面はひづめる／馬冷薯を掘る男は悲し病みくゑて爪のある指既に曲がれる／南瓜のつるに手をする真裸男の土谷勉は赤銅の色／六十あまり二つかぞへる女ありて龍神隊の意気天を突く「新聞をよみ」／浮流雷の爆発音よ滯遠く立つ水柱島の嶺を越す／農兵の語源を想ふ皇土護持太平洋はに醜を葬りて／み民われ今日ある生命大君に捧げて瀬戸の島は守らむ

泉短歌 泉俊夫「短歌詠草」6首——

夕窓に泛びて白き鳥磯の眼に清清し夏は来にけり／朝光に群れ飛ぶ蝶のしらしらと青葉をよぎるときに耀ふ／鳥々のあわひを低く又高く哨戒機翔ぶ朝のとどろき／吾が療の裏の斜面を掘りうがち防空壕を備えむとすも／壕を掘る音戛戛とひびきつつ此の日頃良き日和続けり／療裏は壕掘る療友ら出入りてとみに賑はふ日中となりぬ

綾井短歌 綾井譲は無題で3首——「山原に防空壕は堀られけりゆめおろそかに命すまじき／壕ぬちに明りを灯けて堀り進む固き槌音さやかにひゞく／足音の高く籠れば壕ぬちに童の如声をたてにき」。

小見山短歌 「短歌」／日日のうた」と題して小見山和夫が12首——

沖縄戦まさに緊迫の段階を日日伝へつつはらむ神気はや／敵艦を諸にくだかむ必死行に征つ神鷲が日夜つぎつつ／来襲機日をつぎて増すになほ耐へて静けきはやがて神氣至らむ／鉄量の大きさはさあれ敢然とはばむ肉弾のはげしさをこそ／首里は日本で最も古き城下町なるを。／わが国の歴史に古き城下町首里にもすでに敵は迫りつ／一と町の由緒に執す感傷のさもあれすでに戦火およびつ／川染陽哉氏を案じて。／生きざらむ命を書きて後絶へし消息をおもふ沖縄の基地に／平井氏を送りて。／本土決戦明日にか迫るときにして征で行く者にふかくたのみつ／眼力はや敢なかる梅雨夕べ共に貰の火を磨めせつつ／所在なく住みつつもとな梅雨夕べ煙草のしめりぼそとつぶやく／ひといろと陽のいちじるき浜径は砂の低みにわが眼つまづく／梅雨晴れとはや白き陽の庭ながら陽の白き庭なるをわが眼のみ月の光とも

浅野短歌 浅野繁は、みずからの「短歌作品」を「戦列の息吹」と題した。その10首——

灯に艶ふ防空壕の断層をまざまざと瞻つつ堀り励むかも／堀りはげむ壕に点せし灯明りを生きてさまよふ蚊のありにけり／癩とふ念ひ忘らへ堀りはげむ壕のくらがりににほふ汗の香／壕をいづる視野展けたりまつぶさに若葉の空は茜さすかも／堀りぬきし壕より出づる昼つかた眼に漲らふ樹々のみどりや／機雷監視の眼を凝らしめる海のうへ飛びゆくものの蝶は紛れず／空襲警報のブザーがひびく朝空に樹々はつぶさに■「律」の偏が人偏、ルビに「いのち」とふったうえで抹消線が引かれている］／敵機いまのがれゆきにけり諸

樹々のみどりの光りはせちなきまでに／うら
ふかき嘆きは堪へて病む童ろに説き聴かすか
も思を尽す道／馬鈴薯の花咲きにける斜面畑
ここにぞ染む青き気流は

喜田自句自解 喜田正秋の「自句自解 五」
もだいぶ回をかさねた。句は「滯笹を越ゆる波
あり夜光虫」。これまでも「滯笹」の語は、い
くにんかの詩歌にみえた。

滯笹とは河川や浅海の処に舟艇の往来を安全
ならしめるため、其の滯筋を一見して解るが
如く水中に挿してある笹竹で、滯を示す標の
笹と解せばよい。／夜光虫は夜、海波上に浮
動して水波の動揺に従つて無数の青光を発す
る微細な動物である。／夏の或る夕、海浜を
散策しながら不図沖を見ると海中に挿された
滯笹を波がつぎつぎと越してゐる。晩夏は土
用波などと云つて波が高いとは聞いてゐたが、
それにしても、滯笹を越えるとは……、との
軽い驚きが其の儘「滯笹を越ゆる波あり」と
自然に流出たので季語には夜の海にもつとも
ふさはしい夜光虫を据ゑた。／滯笹を越ゆる
波と水波の動揺によつて発行する夜光虫とが
渾然一体となつて此の句をなしたのである。
／最初の「滯笹」と「夜光虫」の解説を
読めば句意は自然と判つて戴けることと思
ふ。

数年まえにわたしは、大島の西海岸新棧橋で海
中に光る生物をみた。夜光虫か。

喜田の稿は、謄写版刷り原稿用紙に記されて
いて、その裏面には、切り抜かれた風景画の印
刷物が貼つてある。

松田詩 松田美津夫は、「No.23 10×20」
「No.」の文字と梃目が印刷された原稿用紙4枚
に4編の「詩」を展げた。「留守居」(末尾に「六
月十八日九時」の記載あり)、「花」、「夢ならぬ
夢」、そしてもうひとつが「感想」／今日一日」

朝かぜに吹かれながら洗顔をすました私は女
持の手鏡を左手につくづくとわが顔を見つめ
た。其処に映つり現わされて居るのは言ふに

及ぶはずわが男ぶりである、さても美しやと
言いたい山々ながら病気にやられた顔つき
は、是、又、我ながらに見られたものでない、
とは言え取りのける事もできないし結局の処、
一生を共にしなければならぬのだ。／わけな
く感じた私は、今日一日の生活に／わが一生
を見いだせそうに思える、以上

作品合評 さきの喜田の稿とは異なる謄写版
刷り原稿用紙3枚の両面に「青松第九号短歌作
品合評／笠居記／小見山、浅野、綾井、赤沢、
泉、笠居」が記されている。

監視交替待つ間しばしの眼に沁みて八つ手葉
に躍る朝光のいろ 泉俊夫／評、小見山。緊
張した監視の一夜が明けてほつとした気持。
疲れた瞳に来る朝光と八つ手のみどり。これ
はたしかに。立派に調つた歌材である。むし
ろ調ひすぎてゐるとも云へる。きびしすぎる
言ひ方かも知れないが、作者はあまりに悠ら
しく。いふことに意を用ひすぎたきらひあり
はしないだろうか、尚この歌で気になるのは
初句から二句『待つ間』の時間である、この
句ではまだ交替前であるが、三句以下から感
じられるのは、交替後のほつとした心のゆと
りである。かゝる仕事の引継ぎといふことは、
緊張から緊張の連続であつて空間は存在しな
い。「待つ間」はいまだ自己の執務時間であ
つてみれば心を放つことは許されないではな
いか。さればむしろ緊張した監視の一夜
が明けたとしたらどうだろうと思ふ／評綾井。
戦時特色のある歌として稍成巧であり、四句
の躍る等もよく利いてゐる、朝光の色とまで
出さなると判る。兎に角作者の落着と云ふ点
には敬服される、少しも余裕とかゆとりをも
たぬ今日の私には学ぶべきである

ひとりの療養者のひとつの作品を、複数の療友
が評する。つぎ――

死守のみあるとこそきけ童べもをみな別の
なくて戦ふ 綾井／評者小見山、この歌。き
びしい戦局の様相を内容としながら何処か緊
迫にとほしいのは何故か？、それは上句が

「死守」といふやうなきびしい言葉を使つて
 ありながら「あるとこそきけ」といふ訴への
 言葉が現実感をうすめ、しかも下句「なくて
 戦ふ」と現実的に結んだため、上下のつなが
 りに緊密をかいだためではないかと思ふ。尚
 語句の上から云つても初句は当突にひゞくや
 うである／評者笠居、緊迫した戦争歌である
 と思ふ。然し此の歌からそうした。緊迫性を
 感じる事は出来ない、それは新聞やラヂオの
 報道を聞いて作った歌であつて実感が出て居
 らない、『死守』と初句にきびしく出てゐな
 がら「あるとこそきけ」の二句がよそよそし
 くして迫力がない。上句の「死守のみ」は当
 突にして。三句四句とのつながりにも難点が
 ある、歌は手先の技巧より題材に体当り精神
 でぶつかるべきである、老練なる作者にこん
 な事を言ふは釈伽に説法か

評の第3——

けふ生きて機雷監視の任を負ふこのさきはひ
 やかならず遂げむ 浅野繁／評者泉。癪を病
 むである私達は何ら御国に御報ひする事が出
 来ない。其の私達に時局下最も重大なる任務
 が降つた。機雷監視である。警防団員として
 直接任務に当る事の出来る。作者の無上の光
 栄でありよろこびである、その感激をものし
 たのであろう。初句の「けふ生きて」は少し
 無理の感がある様に思はれるが此の歌に良く
 効いてをり、作者の感激がよく現はされてゐ
 る／評者笠居、機雷監視の連作の一首である。
 この歌を読みつゝ、海犬養岡麻呂の歌「御民
 吾」を聯想する佳い歌である。作者は機雷監
 視の重大なる責務に今日ある生命を喜び感謝
 して居る。然して「このさきはひやかならず
 遂げむ」と言ふ下四五句は出来たと思ふか、
 慾を言へば初句「けふ生きて」は当突である。
 この一首を連作から切放して。鑑賞する時に
 独立性にとほしひと思ふは私の無理か、／今
 度の機雷監視哨詠。浅野、赤沢、泉。各自個
 性が出て居つて面白く読んだ中でこの歌が佳
 いと思ふた

評の第4——

横穴の壕より出でて仰ぎ見る空の真澄みに昼
 の月あり 笠居誠一／評者泉、横穴式の防空
 壕其の暗い壕から出て来て空を仰ぐと澄み渡
 った空に昼の月が浮んでゐたの意であらう、
 淡々として素直な詠みぶりである、だが初句
 より二句三句にかけて、何かまだるつこい感
 がある様に思はれる。作者としても詠み足り
 ないものがあるではなからうか／評者赤沢、
 ほの暗い壕内から出て周囲の圧迫感を脱した
 眼に偶然触れた幽寂な自然美が感動の中心と
 なり。一首の歌を構成してゐる。「昼の月あ
 り」等淡々と詠じてゐるが擱むべき所は。適
 格に擱んでゐるので真実性があり。淡々とし
 て尽きざる味はひを有する老練な作である

評の第5——

機雷監視の視野ひそやかに照る月の動くとも
 なし夜は更けにつゝ 赤沢／評者小見山、泉
 君の歌とは亦違つた見方の歌として面白い。
 この歌の場合でも物足りなさを覚ゆるのは少
 しおとなしすぎることである、癪者の身を持
 つて。直接皇土護持の任務にあたることの出
 来る事実まさしく我等もまた。大君の赤子で
 あることの意識とほこりを持つて挺身する心
 の張りを欲しいと思ふ／おだやかにすぎると
 思はれるのは或は結句のみの上から来る感じ
 かもしれないが？、さらに語句について言へ
 ば「動くともなし」は適切ではないと思ふし。
 五句の結びも安易にすぎるやうである／評者
 浅野。戦列に直接参加出来ない。現実にはわれ
 われは幾度となく嘆いた事であらうか……。
 しかし戦ひがいよいよ苛烈となつて来。機雷
 監視の任務をゆくりなく。われわれが負ふこ
 とを得て如何にその任務の重大であるかに思
 ひを致すと同時に。病むてゐても皇国護持の
 一翼をになふことの出来得た喜びは。病む身
 であるが故に深い感動を覚える。その機雷監
 視の任を負ふた作者が自然ときびしい現実と
 の矛盾に澄んだ詩情を把握したものがこの作
 品であらう……／夜の更けるにしたがつて。

冴えかへる月の光。戦の生理を探求しようとする。作者の努力が覗がはれる。ただ望むらくは表現上に於て作者の常套的な言語が鼻につく、「ひそやか」の言葉等もつと緊迫性があつてもよいのではないか。「動くともなし」の「ともなし」はもつと適当な言葉にしたい。さうすれば「照る月」が生きて来。／その情景を髣髴と等三者の臉に印象づける事が出来るであらう

評の第6——

病みつゝも更に病みゐる人のため捧ぐ誠ぞ益良雄の道 小見山和夫／評者浅野。作者の言はんとする意途は判るのであるが。常識を一步も脱してゐないやうに思ふ。上の五七五はまだ言葉が不充分であり。考へる余地がある。往年大島の歌壇に於て個性の匂ひ高い風格を持してゐた兄が近来あまりふるはないのは病状の然らしむるところであらうがまた。次の段階に進むべき脱皮をしてゐるのかも知れない。ともあれ次に来たるものに大いなる期待を掛ける次第である／評者綾井、難解と言ふ一言に尽きる、特に小見山君の作品としては大曾拙い連作の一首と思はれるが？

療友同志の評であつても、それは厳しい。また、癪者としての戦時へのむきあい方が、評のなかでのひとつの議論となっている。

林東風 無地の白紙に細かな字で林東風が「青松園の俳句／(鳴野四月号を手にして)」を記した。

試験室からかへり医局によると鳴野四月号が来てゐた。／鳴野は投句してゐるだけ見るのが楽しみである、白衣のポケットに入れ昼食後封を切る。雑詠選の最后から東風の名を探してゆく喜びは四十五才になつても子供と同じである。今月の号は星塚の座談会があつたり曾青の戦災記の素張しいのがあつたりで甚だ興味深い青松園の中だけとしてみても一寸感慨深い、園内には幾冊も入っていないだらふ。句会以外の人の目につく機会も尠いのでないかと思ひ昨日メ切の青松に今日着いた

四月号のホットニュースをかゝげる。青松の有難いところである。

と「鳴野」という俳誌らしい逐次刊行物が紹介された(末尾に「六月二十一日夕」の記述あり)。

『**鳴野**』 ここで、林が寄稿の掲載をこころ待ちにしていたという『鳴野』についての情報を示しておこう。

インターネットで「鳴野」を検索したところ、「在日コリアン・ハンセン病問題・沖縄—平和・人権—」と題されたウェブサイトの記事がヒットした(2016年9月1日閲覧)。見出し「ハンセン病療養所の方々の俳句を掲載した雑誌「鳴野」とそれを引き継いだ「雲海」のもとで——

和泉市は、近代俳句界に名の残る本田一杉(大阪市内城東区で医者)の弟子木下一路さんの故郷で和泉市役所前に自宅があつたそうです。／木下一路さんも本田一杉と戦前から全国のハンセン病療養所を訪問していた方です。和泉市内で俳句の指導にもあたられました。本田一杉は俳句の雑誌「鳴野」を刊行して療養所の方が投句した作品を掲載しました。紙の不足時代も続けたのです。「鳴野」は後に「雲海」となり、現在は堺市の田宮美千代さん(本田一杉の最年少の弟子に1945年になつた方で女性は極めて少なかった)が1人で継続されています。雲海の句会には和泉市の方の参加が多いのです。長く続いて欲しいと願うところです。先日研修を頼まれて「ハンセン病問題を考えるネットワーク泉北」のメンバーで出かけましたが、木下一路さんの親族の方とお会いする機会に恵まれました。地元の歴史に関わることは楽しいです。

とのこと(2011年7月9日付)。

『鳴野』は、大阪で編集発行された逐次刊行物のようなので、大阪府立図書館の蔵書検索システムで検索したところ、『鳴野』13件がヒットした(「責任表示 西村武雄／出版地 大阪／出版者 鳴野発行所／刊行頻度 月刊」。2016年9月1日閲覧)。同館には、7(6)〈76〉(1942

年6月)から11(8・9)(1946年8月)まで欠号をふくみながらも13点が所蔵されている(未見)。1945年発行分は、10(2)〈108〉(2月)、10(3)〈109〉(3月)があり、そのつぎは1946年7月の11(7)、同年8月の11(8・9)となる。林が楽しみにしていたであろう稿がみられるかどうか⁷⁾。

前掲大島青松園入園者自治会編『閉ざされた島の昭和史』の「文芸活動の歷程」と題された節に、この『鳴野』についての記述があった。同節のなかの「『藻汐草』発行と外部指向の胎動」と題がつけられた項で、北條民雄、明石海人、小川正子について記したあとに「全国療友の文芸熱をそそり、外部の先生方や同好者の来島が相次ぎ、〔昭和〕13年だけでも俳句では、大阪の医師本田一杉(鳴野主催)〔中略〕が訪れ、目を開く刺激となっている」と当時のようすがふりかえられ、また、「『鳴野』は、全国の貧しいハ氏病作者を対象に創刊された俳誌で、門戸解放の最たるものだった」と評価されていた。

この『鳴野』はいまのところ大島ではみつかっていない。

てっちゃん ふたたび、「高二 大西哲司」。こんどは水彩画。おそらく大島の北山からみた西の海の風景。海には帆船が浮かぶ。島、海、船、松、と大島らしい風景画。

手紙 巻頭の「目次」では、「青松園の俳句 林東風(七九)」のつぎが「あとがき(八四)」となっていたが、ページノンブル82と83として、「林文雄先生／奥様」に宛てられた手紙が綴じられている。差出人は、「坂出市新開一四〇三／井村三郎」、日付は「六月七日」――

拝啓、先般は突然島へまいりましたが、先生御夫妻のお名前は予ねて存じておりましたが、御目にかゝるのは初めてで御座いました。私の様な若僧に対してまで色々お話下さいまして有難う存じました、私が退職してから四年

振りでしたが、その節は、「青松」といふ冊子みせて頂き、病者の方々の止むに止まれぬ文学する心がありのまゝににじみ出てゐるやうに思へました、字の書き振りで大体誰れの原稿か判りました位、土谷勉氏、浅野君、小見山さん、笠居さん、松田美津夫さん等々、藻汐草ありし頃の誌上に出た人々、あの頃毎月の様に原稿読まれたし、その上編輯に当つては既に病者からもお聞きになられて御承知の様に色々の問題にぶつかりましただけに、本当に懐しい思ひ出でした、／今では先生が御面倒みて下さる由、病者も欣んでゐることでせう、今後とも何卒よろしく御願ひします、／尚その節、スカートピーを頂き有難う御座いました、愚妻に大島の花の香を見せてやりました、とてもなつかしがつてゐました、／御二人の御健康を切に祈ります、／末筆ながら高橋先生にくれぐれもよろしく御伝へ下さい

訪島後の礼状か。そのときまで林とは面識のなかった退職者らしい。

あとがき ページノンブルのないところに掲載された「あとがき」――

◎高橋先生にお願ひしましたところ、山口技師の御尽力で計らずも園長先生の御写真をいただくことが出来、林先生の御世話で園長先生がわざわざ短冊まで書いて下さつて、この巻頭を飾ることを得たことは、何ともお礼の言ひ様もないほどうれしい。／ほんとに御三方有難うございました。病友一同、さぞ吃驚して喜ぶことでせう。／“み民我れ／勝抜く誓ひ／高らかに心の結び／堅めざらめや”／みんな一緒に声高く朗誦せうではありませんか。／◎いよいよ夏が来ました。心頭滅却せずとも、暑さ位に屁古垂れたくないものだ。／◎第十号の原稿を机上に積上げた処、謀将三木氏の奮戦ではからずも楽しい一夕を

7) なお同誌は、国立国会図書館には1947年1月から1949年6月までの号(欠号あり、マイクロフィルム)があり、日本近代文学館の図書・雑誌検索ではヒットなしだった(2016年9月1日閲覧)。

持つことを得、この号は放送文芸もこめ“園長先生を搞ふ号”のつもりで編輯を急いだ。拙筆で、御苦笑の他ないが、五百六十人療友の微衷が汲んでいたら幸甚です。／◎二十六日夕朗読して下さったのは庶務部の岡本さんでした。きかれる人があつたのでこゝに記したい。／実際、園長先生思慕の情には切々たるものがあるのであつて、あの夜の放送で途切れている。ページノンブルがないので、これは下書きだったか、ではなぜそれを綴じたか。このページの欄外には、手書きで「50号」とある。

また裏面は、「第五十号室」との手書きがある謄写版刷りで——

このたび皆さんと相談して新しく出来た作業互助改正特別委員会の参考資料にするのですから各種の質問に対して正直にお答え下さい／それには次の御注意を願ひます／一、室の意見をまとめてお答え下さい／一、答には室員全部の意見か又は何人の意見か(カッコ)をしてその中へ(全員)又は(何人)と書いて下さい／一、よく分らないところは常務委員会にお尋ね下さい／一、書く人が居ない室はどなたかに自分の室の意見を書いてもらつて下さい／一、来る水曜日(三十日)の朝集めに参りますからそれまでに書きまとめて置いて下さい／昭和八年十一月二十七日／常務委員会／特別委員会

と記してあった。ずいぶんと古い文書の再利用だ。

つぎのページノンブル84と記されたところに、ふたたび「あとがき」がある。ペンの手はおなじ——

◎いよいよ夏である。心頭滅却せずとも暑さ位に屁古垂れたくないものだ。／◎第十号の原稿を机上に積上げた処、はからずも謀将三木氏の奮戦で、たのしい二十六日の一夕を持つことを得、この号は放送文芸もこめ“園長先生を搞ふ号”のつもりで編輯を急いだ。拙

筆で御苦笑の他ないが、五百六十人療友の微衷が汲んでいたら幸甚である。／◎あの夜の朗読は庶ム部の岡本さんでした。きかれる人があつたので記したい。／実際、園長先生思慕の情には、切々たるものがあるのであつて、あの夜の放送〔ここがページの最後尾になっているところはさきの稿におなじ。改ページ〕

はそのほんの一端に過ぎない。／◎やさしい園長先生と共に理解深い事ム官をいたゞくことは、青松にとつて鬼に金棒である。／「天に雪霜なくんば／青松も草にしかず」／吹き荒ぶ雪霜の下、満目荒涼たる中に一人たつ毅然たる青松の姿。／そこに野嶋園長先生があり／末沢事ム官があり、職員、病友打つて一丸たる拳島一致鋼の備へがあるのだ。／「不敗の砦、青松園」／◎長田大人の快復尚日浅く原稿のいたゞけなかつたことは淋しいが／笠居／浅の／喜田／泉／小見山／綾井／斉木／の古強者は元より、島の俊豪嚮を並べての出馬を見たことは何ともうれしい。瘦馬に鞭をあて流れる汗を腰の手拭で拭き拭き、たのしい／第十号／“園長先生に感謝を捧ぐ”／この巻の編輯を終りたい。／土谷勉

特別な号ということなのだろう、本誌創刊に尽力した土谷による編集だった。だが、長田穂波の原稿をとれなかったとはどういうことか。穂波生の稿があるのに。

なお綴じ方は、「第五十号室」との手書きがある謄写版刷りのページと、ノンブル84のページは、折りたたまれて内側になっている。

林文雄 「役員名簿／会員名簿／寄附者名簿」の文字が活版印刷された変形の紙に記された文字は、林文雄とみてよいだろう。冒頭右端上部に線で囲んで、「石本兄／土谷兄／三木兄／外」とある——

大成功、素張し、うれし、感謝す、昨夕の園長先生の嬉しさふな御顔本当に見せたかった、石本兄の挨拶と云ひ三君の讃辞、それをつなぐアナウンサーミキの親しい温い声、今迄兄

らが一度は現したいと思って居られた野島園長思慕の誠が一度にせきを切られた様に美しい温い雰囲気が一本の線を通じてかなしき許り迫ってきた、園長の答辞の真実に充つる御声、事務方の喜に充ちた謝辞、高橋先生のニコニコ顔、有難ふ有難ふ、もう時局は一寸放送の夕でもなくなってきた、最後を飾る美しさと思ふ、皆御苦勞様〔改ページ〕

作文もよかった、ことにあの女の子のは可愛かった、浅野兄御苦勞様／青松をたのしみにしてゐます／二十七日朝 林文雄

七月二日青松受飲／急いで書いた手紙まで綴込んであって恐縮した。本当に嬉しかった。それにこの青松の充実はどうだらふ。園長先生もきっと喜ばれる事だらふ。早く見せて差上げたい。／高橋先生が山口技師持参の園長近影を貼って下された。表紙のは一寸間に会ハぬので小生絵をかき写真風景はあとから貼る事にしすぐ園長室に持って上る。今晚御宅にもってかへって戴いて奥様やお譲様にも喜んで戴かふ。小生らあとから又今一度ゆっくり拝見する。林文雄

貼るはずの表紙写真は、ついに貼られなかったのか。

青山荘だより 林の稿がつづく。「昭和十五年七月／大島療養所業績集／(昭和十四年末迄)」の文字が謄写版で刷られた紙の裏を再利用し、もう1枚は無地の紙の両面を使用。ここからは綴じの順が逆になっている。いったん本号を綴じたうえで、あらためて挿みこんだか――

青山荘だより／七月十日午後記／◎八日朝救護隊の一人として高松に行き九日夜帰島。十日正午フト気がついたので正午の一とき諸君に報告放送したのでこゝに管々書かず済む。／◎三日に船があったのでその正午に手元に来たこの青松を園長さんに御覧に入れ高松へ持ってかへって戴く。ロダンの写真が惜しいのでこの裏の絵に紙を貼っておいた。丁度土谷君から園長の号が管茶山のそれに(小説傑作集に在り)似て居る理由を尋ねられた。

園長は管茶山と同じ郷里、備後神辺^{かんべ}の産、同学の士は茶山の号に因なんだものを付けて努力した由。それは面白いからこの紙に書いて下さいと托したのであった。／◎それが四日拂曉の空襲となったのであるが突嗟の場合に非常袋と隣室の机に昨夜夫人と共に御覧になって喜ばれた青松を持って焼夷弾の雨の中を逃れ田の中を進まれた。田も亦油脂弾のために火の海と化したと云ふ。／◎今日朝園長官舎で夫人が汚れましたとお詫びを云ひ云ひ御返し下された。余は否、あの夜これのみはと手にかゝへ出でられた、その夜の土、その暁の泥のあとこそ病友にいかに大なる感激を与ふる事ならんと謝したのである。〔この「病友」のうえにも「◎」あり〕／◎彫塑界の巨人オーギュストロダンの写真、決して勿体なからず、寧ろこの記念すべき号に適しき表紙裏表紙である。／◎この点々たる土の跡を永久に忘るゝ事勿れ。／八日高松瞥見／灰燼の街は果なし雲の峰炎天に鉄骨焼けてゆがみ立つ青葉一枚残さず赤き焦土都市兵燹^{せん}を脱れし家のくちなしに兵燹を脱れくちなし悲しきまで／夜済生会の／二階に宿る／梅雨闇の灰燼の街に／汽車入り来／灰燼の街をめぐりて／蛙声しきり／明易き灰燼に焰ひとしきり〔改ページ〕

救護所／汗の掌に受けて拝みて／握り飯／家庭園の胡瓜が／余の非常袋に／包みてありぬ／生きうりかぢりつゝ、食ふ／にぎり飯／胡瓜かぢり戦災の朝／生きてゐし／運ばれしまゝ、こときれし／胸の汗／夏季題空しく求む／たゞ焼土／◎職員は多忙を極めゆっくり青松は見て居れぬ。／今高橋先生に目を通して戴いた。婦長が昼の便で高松から帰ったのでこれを廻す。副長今朝高松へ行った、見せたいがどうなるか、明日明后日(11, 12日)二日間看護婦控室において回覧させ十三日位にそちらへ廻させませう。／◎この頁の次に園長の号の記事書かねばならぬのだがと園長御詫びしてゐました。いやいやこのお忙しい

中ですものと申しておきました。土谷兄にもこの前の小生のメモに従ってこゝは書き留めておいて下されば良い記念になりませう。／◎今日は朝飯をたべてから食休みに眠って丁十時過本館へ出て放送をしてかへり空襲警報で出てきて医官室の椅子でウトウト。全くいぢがな。二日間立ちづくめと云へ両股がこはばって痛い。／全く意久地がな。長い間休養してゐたので無理もなし。併し体に少しも異常がな。有難い。／◎災害のあと伝染病はつきものです。皆気をつけて下さい。御大事に〔改ページ〕

七月二十日／青松は廻り廻って再びわが官舎へもどって来た、もうとうに園内に行つてゐるものと思つてゐたが職員もこの記念すべき本号を手離し難かつたのであらふ。でハ今日はリレーレースの如く詰所まで相たづさへて行き引渡すことゝせん哉／青松園主人

この「青松園主人」とは園長野島か。

ロダン 林が記したとおり、本号の末尾には「DANSEUSE HANACO AUGUSTE RODIN」のキャプションがついた切り抜き写真が貼つてある。

手づくり 手書き手づくりの『青松』は、大島では療養者と医師や職員とがいっしょになつて編集発行していた総合誌『藻汐草』を休刊させた戦時への、ひとつの抵抗の意味をもつていた。印刷用紙や原稿用紙が希少となれば、謄写版で刷つた原稿用紙を使い、かつて文字を記した原稿用紙の裏を用い、さらには、療養所らしく「内用薬」票の裏面までも活用して、在園者たちはそれらに文字を記していった。印刷のインクも減つてゆけば、複製をつくらずに、たった1冊だけの読みものを手づくり、それを同人たちのあいだで廻し読みしていった。

大島でもっとも古い逐次刊行物の創刊を、1919年とする記録がある。ただしその創刊号はいまのところみつからない。大島では1930年代に複数の逐次刊行物が創刊される。それから10年以上を経たところで、あつまった同人に

よつて、その集団の内外を、また療養所の内外を、つないでゆく媒体を必要とし、それをたのしみ、それに苦勞し、それをありがたいとする慣行が整い、落ち着いていったのだつた。紙が減り印刷がむづかしくなれば自分たちでつくればよい、つくることができる、と確信する療養者と医師とが複数人いて、彼らによつて手書き手づくりの『青松』がつくられ、読まれていった。

ただし、時世は戦時であり、「一億の、末の末なる片居われ」との自覚をもつ療養者たちが、身体を、とりわけ五体肉体を駆使して奉公する戦争にわが身を提供できないと痛感するなかで、いかにこの身を戦時報国に捧げるのかを開陳する場がまた、『青松』のその誌面となつた。そこには、彼らの「戦ひ」が展望され、説かれ、みせられていった(女性の寄稿はほとんどない)。機雷監視哨と防空壕構築が、重要な実践となつた。

療養者たちが「社会」と呼んだ、療養所の外にひろがる生活、政治、経済、外交などなどの空間で唱えられた拳島を島でも遂行しようとするとき、「拳島」の核が園長であり、彼が慈父であると仰ぎみられた。その「園長」をねぎらうために、彼に捧げられた療養者(と医師と職員)の報恩の総意が、この『青松』第10号そのものだつた。

just one なぜ、わたしたちはこの『青松』第10号を手にすることができるのか。ねぎらいの証として、思慕と報恩の徴として「園長」に捧げられた『青松』第10号は、彼の手許にあるはずだ。第10号のゆくえを医師林文雄が記録していた。それが本号の末尾に綴じられた稿である。

園長に捧げられた所内放送が6月26日夕のこと、林はその翌27日朝付でそれへの感想を記していた。それが掲載された『青松』第10号が、7月2日は林のもとに廻つてゐた。そして翌々日の7月4日未明、高松空襲となる。園長は戦禍に被災しながらも、この捧げものを避難のさ

なかに持っていったのだった。「この記念すべき本号」はまた大島に帰り、7月20日付で「詰所」（おそらく療養者たちの）にもどった。同人誌といってよい手書き手づくり『青松』はしばしばその表表紙や裏表紙に廻覧順を載せていた。「この記念すべき本号」は、それらの輪をこえて、「リレーレースの如く」に島外から島内へ、職員の手を経て療養者のもとへ廻った「挙島」の表徴となったといえよう。

手書き手づくり『青松』次号第11号は、「高松戦災特輯号」を組むこととなる。1945年8月上旬の発行。

【附記】

本稿は2016年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS科研費26370788, 研究代表者石居人也), 2016年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交ぜる」の成果の1つである。